

# 八世紀（Ⅱ期～Ⅲ期）の鞠智城と肥後地域―新羅山城との比較検討から―

近藤 浩一

## はじめに

近年の日本列島の古代山城研究は、その築城目的、役割・機能を唐・新羅に対する防衛施設と同一に扱う固定した山城観にとらわれない研究の必要性が提唱されている（近藤二〇一五・二〇一六の参考文献、亀田二〇一六、向井二〇一六）。特に、六九八年に繕治記録がみられ大宰府のもとで八世紀以降も存続したことが明確な大野城（筑前）・基肄城（肥前）・鞠智城（肥後）は、大宰府跡の発掘・研究の進展で都城形成の諸段階が明らかになったのに加え、これら三城に対する調査が飛躍的に進んだことに合わせて、中央政府の動向も視野に入れつつ大宰府との関係を唱える考えが示された（杉原二〇一一、小田富二〇一三・二〇一五・二〇一六など）。さらに近年では、大宰府政庁Ⅰ期後半（新段階・六八九年の新城記録）・大宰府政庁Ⅱ期と西海道諸国の官衙建物の造営に対比させながら、大野城・基肄城・鞠智城にみられる倉庫群・城門などの内部施設の増改築の連動性が指摘されている（赤司二〇一四、九州歴史資料館二〇一五、杉原二〇一六、矢野二〇一六など）。

特に鞠智城は、文献史料は数点にとどまるものの発掘調査の進展並びに調査機関の尽力により、出土遺構と遺物の緻密な整理にもとづき次のように時期区分がなされている。

Ⅰ期（七世紀第3四半期～第4四半期）創建期

Ⅱ期（七世紀末～八世紀第1四半期前半）隆盛期  
Ⅲ期（八世紀第1四半期後半～八世紀第3四半期）転換期  
Ⅳ期（八世紀第4四半期～九世紀第3四半期）変革期  
Ⅴ期（九世紀第4四半期～十世紀第3四半期）終末期

そのため、各時期にスポットをあてた具体的な個別研究もあらわれ、鞠智城の役割・機能が各時代の国内外情勢によって段階的に変化したことや、山城経営の重層性が強調されるようになった（佐藤二〇一四、木崎二〇一四、鞠智城跡「特別研究」二〇一二～一六など）。折しも私も昨年度の特別研究で、Ⅰ期後半から増改築が開始されⅡ期に八角形建物・L字建物群があらわれる意味を、河南二聖山城など新羅山城に鞠智城と共通する建物跡が多いことを手掛かりに、当時の緊密な日羅関係を背景に新羅山城の技術・文化的要素が伝播していた可能性を提示した（近藤二〇一六）<sup>①</sup>。加えて最近の研究では、Ⅱ期になると兵舎までが消失するとされているが（木村二〇一六）、そうであればⅡ期鞠智城が防衛ラインの一端を担うことは全くなかったことになる。

何より、Ⅱ期～Ⅲ期鞠智城並びに八世紀以降も機能した大野城・基肄城などに増改築された建物の大半は、倉庫群であった。高安城でも八世紀前半と推定される礎石式倉庫跡が発見されており、その頃の山城増改築のプランで最も重要なのは倉庫群の建設にあったと

いえる。この問題に最初に取り組んだのは鏡山猛氏であったが、それ以降も古代山城研究者のなかでは比較的注目されてきている。特に近年、赤司善彦氏により大野城・基肄城の建物跡にみる構造を綿密に整理することで出された時期区分は、研究の到達点を示すものである。さらに赤司氏は、それらの動向と鞠智城の建物跡との比較検討にも及んで、その大半は日本の地方郡家に存在する飢饉などを想定した不動倉・義倉であって、大宝初年より拡充された律令国家の地方支配にもとづく論じている（赤司二〇一四・二〇一五）。

とはいえここでやや指摘したいのは、古代山城本来のもつ軍事、外交的な機能との関係である。既存の八世紀の山城倉庫研究では、倉庫群が形成される七世紀末から八世紀の対外関係にほとんど目が向けられなかったが、山城における倉庫（礎石式総柱倉庫）形成がほぼ九州という限定した地域であることには注目すべきでないか。特に鞠智城は、他の山城にみられない荘厳な建物まで建築されているが、歴史的にも有明海を介した交流実績をもつ肥後地域に位置する。そもそも、既存の研究では八世紀の山城への倉庫群建築を山城が対外的な機能を放棄した姿と解釈するが、例えば倉庫の物品が対外的に利用される場合も否定できないため一概には言えないだろう。

本稿は、昨年度の続編でありⅡ期Ⅲ期の鞠智城を扱うが、同時に大宰府のもとで増改築された大野城・基肄城を含めた古代山城の倉庫群、とりわけ長倉にスポットを当て、比較的近い時期の新羅山城に存在した倉庫跡との関連性を検討する。さらに、八世紀の肥後地域・鞠智城に対して隼人・南島支配との関係から検討されることはあったが、八世紀前半の対外的にみた最大の国家事業といえれば遣唐使関係であるので、新羅（朝鮮半島）との交流はもとより東ア

ジア交通のなかでそれらを位置付けてみたいと考えている。

## 一・七世紀末～八世紀・日本古代の山城に形成された倉庫群とⅡ期Ⅲ期の鞠智城

### （一）大野城・基肄城・鞠智城の長倉・倉庫群について

次の史料から周知のように、

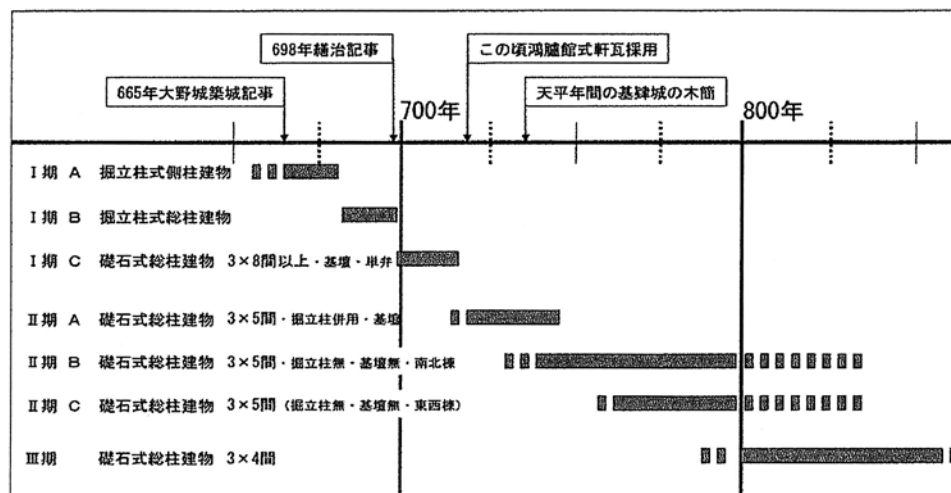
令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。（『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条）

鞠智城を含めた大野城・基肄城の三城は、六九八年頃に大宰府のもとで繕治（増改築）された。さらに広くみれば、単に時期が同一であったというにとどまらず、共通の経営プランによりなされたと考ええる方が自然であろう。ゆえにはじめに、先学に若干の補足的私見を加える程度であるが、大野城と基肄城で増改築された建物跡の特徴を概観し、鞠智城のそれらと比較してみたい。

大野城に七〇余棟、基肄城には四〇余棟の建物跡が確認されているが、研究の初期段階からその大半は規格性を有した倉庫群と推定されている（鏡山一九七二、小田富二〇一三）。最初に大野城であるが、近年の赤司善彦氏の研究は、倉庫建物跡をすべて網羅した緻密な整理に加え、役割に対しては大胆な仮説までを提示しており、今後の指標となると考えられる。ここでも、私は考古学が専門でないため赤司氏のデータをそのまま挙げ、いくらか補足してみたい。

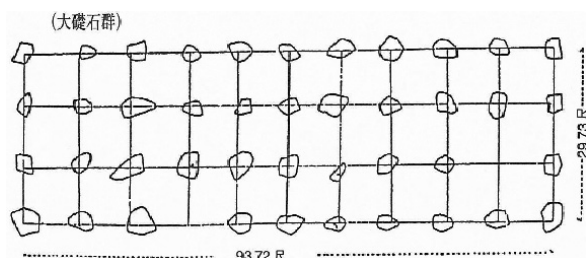
大野城の建物跡の変遷で最も特徴的なのは、数が最大で圧倒的な規格性を有した三×五間の礎石式総柱建物で、鴻臚館式軒瓦の採用期である七二〇年頃のⅡ期Aから出現し、Ⅱ期B（天平期頃）から

ことである。これは、以後の大野城の機能に直結する三×五間建物の建設の直前であり、すでにその北側に三×九間の大型掘立柱式総柱建物（Ⅱ）（SB六五）が存在していたにもかかわらず礎石式に建て替えていることをみると、SB六〇の長倉建設は大野城全体の三×五間の倉庫群建設に伴うデモンストレーションとみてとれるのである。



第1図 大野城跡の建物変遷図

は広範な地区に広がり、総数で約三五棟もみられる点であろう。さらに八世紀後半〜九世紀のⅢ期からは、大きさは若干縮小するものの三×四間の礎石式総柱建物が多数建てられており、一定の規格性にもとづいた建物群が連続して建設・存続したことを物語る。さて、ここで改めて強調したいのは、大野城の中心である主城原地区において上記の三×五間の礎石倉庫群に先立ち、少なくとも三×八間（それ以上の三×九間？）の礎石式総柱建物（SB六〇）、いわゆる長倉が出現している



第2図 基肄城北帝地区大礎石跡群

この長倉跡は、最も高所で見晴らしの良い位置（北帝地区Ⅲ群）に目立つように存在しており、後述する古代東国の官衙遺跡に存在する法倉を想起させるものである。

この表でも一目瞭然のように基肄城にみられる建物跡の最大の特徴も、三×五間の礎石式総柱建物によって形成されていることであつた。現在この構造の建物跡は二三棟確認されているが、赤司氏によれば、平面規模が未確定のものもそれに該当する可能性が高く、そうなれば大野城と同数の三五棟となり、同一のマスタープランを想定できるといふ。そしてやはり注目したいのは、三×五間の礎石建物に先立って、大野城のそれよりさらに大型な三×一〇間（二九・七三・九三・七二尺）の上の長棟型式礎石総柱建物、すなわち長倉が建てられている点である（基山町史編さん委員会二〇一一、小田和二〇一五）。

る。なお、SB六〇の礎石が、約七〇cmの版築基壇を設けその上に置かれている構造は、鞠智城の四九号建物跡と共通する。次には基肄城であるが、前述の赤司氏も大野城と同様な視点から検討を加えているが、『基山町史・資料編』二〇一一・五六頁には比較的近年の調査を踏まえて作成された礎石建物跡の一覧表を掲示しているの、それをもとにいくつか補足したい（同書には建物跡の実測図や全貌が明らかな時代に撮影された写真なども掲載されているので、合わせて参照される）。

さらに、この位置からいわゆる「百済系」単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土し、これらは鴻臚館式以前であるため、建物跡は繕治記録の六九八年頃（八世紀初頭）であることが確実視されている（鏡山一九七二）。ところで、調査研究の初期段階よりこれらの瓦に注目した鏡山氏は、軒丸瓦の単弁は百済系（百済の直写形式）の可能性が高いながらも北部九州並びに近畿の新羅系統の特色も有していることを指摘している。また重弧文の瓦面に施された櫛目状の掻き目も日本の瓦には珍しく韓国瓦の手法であるとし、さらにはこの手法を施した瓦が古代東国の常陸国新治郡家（郡衙）で出土しているとされる。こうした広い視野は先見の明というよりほかならないが、後述するように近年調査研究が大きく進展した古代東国の長倉（法倉）の性格と合わせて検討する必要があることを想起させる。

このように、八世紀前半（七二〇年頃）の大野城と基肄城では、三×五間の礎石式総柱の倉庫群の建設ラッシュがあったが、それに先立ち長倉である大型礎石建物を目立つ位置に建設したのである。両城にとってこの意味は大きいと考えられるが、鞠智城の場合はどうであったのであろうか。『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八―三二次調査報告―』では、鞠智城の建物の建設時期と存続期間を一覧にして提示しているので（井上二〇一六、小西二〇一六も参照）、総柱建物の倉庫跡について上と同様な視点から若干述べていきたい。

これらによると鞠智城では、創建期Ⅰ期（七世紀第3四半期）第4四半期）から、小型の側柱建物が多いものの一・五（五号は板倉に復元）・六九・七〇号の掘立式総柱建物が建設されている。Ⅱ期に入ると四〇（小西二〇一六ではⅠ期に分類）・四二・四三号が増築され、掘立式倉庫群が形成されたようである。なおⅡ期は、「Ⅰ」

字形に掘立柱建物を配置した管理棟的建物群（六二号・六三号）とこの遺構群の南側の八角形建物（三一号・三二号）に代表されるように城内施設の充実が図られ、土器の出土量も多く施設内は他の山城以上に充実した様相であった（西住二〇一五）<sup>（三）</sup>。ただし、大野城・基肄城のような礎石式総柱の倉庫群が形成されるのは、全盛期をやや過ぎた八世紀第1四半期後半のⅢ期<sup>（四）</sup>であることには留意しておく必要がある。Ⅲ期の礎石式総柱倉庫群としては、二二・二三・三四・三七・四九・五〇・六五・六六号などが該当するようであるが、礎石は小型であり大型化するのは八世紀第4四半期からのⅣ期であることも指摘されている。

ところでⅢⅣ期の礎石式総柱の倉庫跡は、多くが三×四間であるといえる<sup>（五）</sup>。三×四間は、前述のように八世紀後半の大野城で多数建造された規模であった。とすれば、この規模形式は鞠智城の方が先行して建設されていたことになる。加えて、八世紀前半の大野城及び基肄城で最初に形成された礎石式総柱倉庫群の規模の三×五間はなかったようであり、大野城・基肄城と鞠智城の倉庫群建設にいくらか違いがあったことも確かめられる。ともあれ、八世紀中葉までに多数の礎石式倉庫群が形成された事実、当代の山城経営並びに機能と直接かかわる問題といえる。そしてやはり強調しておきたいのは、鞠智城にも中心部の長者原地区の西側・長者山東側裾部に三×九間の礎石式総柱建物の宮野礎石群（四九号）、すなわち長倉が存在する点である。報告書各論の小西龍三郎氏の指摘によれば、四九号は、隣接する掘立式総柱の一号・五号の倉庫を立て替えて形成された可能性が高く、その礎石は三〇×四〇cm設けられた版築基壇の上に据えられているという。こうした建造過程は大野城と



も類似しており、鞠智城でも長倉を中心にしながら礎石式倉庫が建設されたとみてとれるのである。さらにこの跡からは、瓦が数種類出土しているため、瓦葺総柱の長倉であったことも窺い知られる。

以上のように、繕治記録のある大宰府管理の三城における長倉を中心とした礎石式倉庫群の建設は、鞠智城では大野城・基肄城より若干新しいものの（ただ、赤司二〇一五は四九号を大野城と同時期のⅡ期に区分する）、七〇一年の大宝律令に伴う律令国家建設と軌を同じくして着手された様子がわかる。瓦の出土から三城の長倉は視覚的にも効力のある大型瓦葺礎石建物であったといえ、他の礎石式倉庫群においても精巧な瓦ではないにしろ瓦葺であったと推察される。古くより鏡山氏の指摘にあるように大宰府の蔵司にも三×九間の礎石式総柱の長倉跡が確認でき、これらは構造からも後述する古代東国（北関東）の法倉に対比できるものと考えられてきている（小西二〇一二・二〇一六）。

ところで、こうした考古学的成果を裏づける文献にみられる古代山城の倉庫記録は次のようである（鈴木拓二〇一〇、松川二〇一六）。

《高安城の倉庫関連資料》

修高安城、收畿内之田税。（『日本書紀』天智八年（六六九）是冬条）

造戸籍、断盜賊与浮浪。・・又修高安城、積穀与塩。又築長門城・筑紫城。（『日本書紀』天智九年（六七〇）二月条）

是日、坂本臣財等次于平石野。時間近江軍在高安城而登之。乃近江軍知財等来、以悉焚秋税倉、皆散亡。仍宿城中。会明臨見西方、自大津・丹比両道、軍衆多至、顕見旗幟。有人曰、近江将壹伎史韓國之師也。財等自高安城降、以渡衛我河、与韓國戰于河西。（『日本

書紀』天武元年（六七二）七月壬子条）

《大野城の倉庫関連資料》

応交替檢定府庫器仗事・・・大野城器仗亦宜准此。（『類聚三代格』貞觀十二年（八七〇）五月二日太政官符）

太政官符 応大野城衛卒糧米依旧納城庫事・・・但至于件城、城辺人居、或屋舍頽毀、或人跡断絶。仍問城司等、申云、此城衛卒卅人、糧米每月廿四斛、元来納城庫。爾時城庫辺百姓等、遂往還之便、求売買之利。從納稅庫以来、人衆無到、売買失術。百姓逃散、惣而由此者。夫守城在人、聚人在食。望請、件糧米特納城庫者。（『類聚三代格』貞觀十八年（八七六）三月十三日太政官符）

凡太宰府庫并大野城器仗、前後司交替檢定之日、破損之物修理。

（『延喜交替式』一五七条）

《基肄城の倉庫関連資料》

「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稻穀隨大監正六上田Ⅱ中朝×」（大宰府跡不丁官衙地区SD二三四〇）

《鞠智城の倉庫関連資料》

「秦人忍□〔米カ〕五斗」（貯水池跡出土一号木簡・Ⅱ期Ⅲ期）

丙辰、肥後国言、菊池城院兵庫鼓、自鳴。・・丁巳、又鳴。（『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八）閏二月丙辰・丁巳条）

大宰府言、・・・又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。（『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八）六月己酉条）

又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。（『日本三代実録』元慶三年（八七九）三月一六日丙午条）

これらによると、三城の例の大半は九世紀中葉以後であり、繕治

記録に程近いものは基肄城の稲穀木簡と鞠智城の荷札にみられる僅かの記録のみである。なお、七世紀代の高安城の倉庫記録も参考にはなろう。高安城で一九七八年に発見以後調査されてきた礎石式総柱倉庫跡（六棟確認され二号・三号は発掘がなされている）は、出土土器の形式から八世紀前半、元明天皇が行幸した七一二年代階と推定されている（棚橋二〇一五、山田二〇一六）。つまりその建設は大野城・基肄城とほぼ同時期であった。八世紀の古代山城、倉庫群の経営については新羅の山城との関連性を探りながら後述したいが、倉庫の種類・規模の具体例としては、八五八年代階であるが鞠智城に鼓などを収納した兵庫、不動倉が一一棟あったとする記録は注目される。最近の報告でも鞠智城Ⅳ期の大型礎石建物跡<sup>⑤</sup>はⅢ期の礎石建物が建て替えられたと言及されていることから、倉庫の個数においてはⅢ期とⅣ期の間でさほど違いがなかったと思われるのである。また不動倉一一棟は次の史料のように、常陸国新治郡災。焼不動倉十三宇、穀九千九百九十石。（『日本紀略』弘仁八年（八一七）十月癸亥条）

基肄城と同手法の半島系瓦が出土している常陸国新治郡のその数にも類似している。不動倉は、稲穀を収納した正倉が満杯となった後に国司・郡司により封印された非常備蓄用の倉（中身の稲穀は不動穀）のことであった。とすると、鞠智城の稲穀の蓄積量は東国の郡家（郡衙）と同規模であったことが推察できる。いずれにしても現在の段階では、八世紀以降の古代日本の山城の性格は、礎石式倉庫群の建設とその経営に集約できるようである。

（二）大宰府による山城倉庫群の経営と古代東国（北関東）の法倉  
鞠智城の運営（管理）主体は、時代ごとに中央政府・大宰府・肥後国のように変化したことが指摘されているが（西本二〇一五）、三城を中心とする繕治期前後の九州の古代山城は、翌年の六九九年にも大宰府に三野城・稲積城の修繕を命じており、大宰府の直接の管理下にあったといえる。上記の八世紀前半、中葉頃の大宰府跡出土木簡を見ると、基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥（肥前・肥後）などの諸国に班給するために大宰府官人の大監を派遣したことがわかる。これは八世紀前半の山城の礎石式倉庫群の実体を直接示すものではないが、当時それらの山城の倉庫は大宰府を中心に連絡網を持ちながら管轄されていたことが読み取れる。なお実務を担当した大監で正六位上の田中朝臣は、史料からも天平四年に大宰少監として赴任した田中朝臣三上であるとみられる。

また基肄城稲穀の使用用途は、天平七年（七三五）に大宰府管内で疫病が流行し疫病患者らに対して二回にわたり賑給した記録があるため、賑給のような特別な場合に配給される不動穀と絡めて理解されている（野崎二〇〇〇、赤司二〇一四、小田和二〇一五、松川二〇一六、向井二〇一六）。特に赤司氏は、山城倉庫の稲穀は義倉的な性格が強く、山城での保管は湿気などの対策からリスクマネジメントに優れていたと述べている。こうしたことは山城倉庫に収められた稲穀などの物品の機能・役割を示すものであるが、基肄城の稲穀が国単位を越えていることは、基肄城はじめ大野城・鞠智城などの倉庫群も所在国にとどまらず西海道を意識した諸国諸郡の税穀収納の場であったと評価できそうである。なお、史料により高安城の倉庫の田税（保管物品には塩も確認）も畿内から徴収されてい

たことを知らせる。加えて、史料より大野城と鞠智城の倉庫には、戦闘用であるかは定かでないが九世紀後半まで武器が所蔵されていたことがわかる。最近の見解に、鞠智城における兵庫の維持は菊鹿盆地の生産力の軍事的・行政的利用にあったといわれるように（五十嵐二〇一六）、古代山城の兵庫は大宰府と結びついた広域行政を可能とした舞台装置であつたのかもしれない。

したがって、六九八年を境に増改築された大野城・基肄城・鞠智城の倉庫群は、大宰府大監が国の異なる肥前の基肄城に直接赴き指揮をとつたように、大宰府の西海道経営に合わせて建設が始まり、一括管理されていたとみてよいのではないか。ところでこれらに関連して、九州の三城に大型礎石式総柱の長倉を含む礎石倉庫群が建造された八世紀前半～中葉において、東北（蝦夷）経営への兵站基地（軍糧輸送など）となった坂東（特に北関東）の官衙遺跡にも、長倉（法倉、総瓦葺丹塗建物も存在）が建設されていた事実が注目される（川口二〇一一、大橋ほか二〇一二、出浦二〇一三、眞保二〇一五）。なかでも、「上野国交替実録帳」佐位郡正倉にみられる八面甲倉・法倉（法板倉・法土倉）の記録と符合する遺構が、群馬県伊勢崎市の三軒屋遺跡で発掘されている。調査担当者である出浦崇氏の近日の見解を示せば次のようである。

「Ⅱ期は八世紀初頭から中頃で、本格的な正倉院の整備が開始される時期である。倉庫は三×三間の総柱式掘立柱建物（八面甲倉）や法期後半には象徴的な倉庫である八角形掘立柱建物（八面甲倉）や法倉と考えられる大型礎石建物（一号礎石建物、「実録帳」の法土倉に比定）も設置される。正倉院域はかなり広大と想定される。Ⅲ期は八世紀中頃から後半を想定しており、大溝による不整形な正倉院

域が確定する時期である。当該期より倉庫の礎石化がはじまるが、依然、掘立柱建物も併存する。…Ⅳ期は九世紀代を想定しており、倉庫は礎石建物にほぼ統一される（法板倉の二号礎石建物はⅣ期後半に建設と想定）。（出浦二〇一三・二〇一六）」

すなわち、点線のように八世紀初頭（Ⅱ期）に掘立柱の穀倉が整備され同中葉（Ⅲ期）に礎石化されたが、下線部のように倉庫群の礎石化に先立ち、Ⅱ期後半に法倉（「実録帳」の法土倉）である大型礎石建物（一号礎石建物）が建設されている。また既存の見解では、象徴的な構造である八角形掘立柱建物（八面甲倉）も法倉であつたと推定されている。とすれば、両法倉は、佐位郡家正倉院内のシンボルであることはもとより、律令国家支配を民衆に知らしめす舞台装置として威光を放っていたことは容易に推察される。

ところで、八角形掘立柱建物は、八世紀のⅡ期鞠智城にも南・北二棟（三一号・三二号）建設されている。ただし鞠智城のものは、心柱を中心に八本の側柱が同心円状に二重（三二号）・三重（三二号）とめぐっているのが、新羅の同時期の国家的な祭儀施設である慶州蘿井の建造物に類似しており、心柱のない三軒屋遺跡の倉庫遺構とは構造上大きく異なるようである（李陽浩二〇一四、近藤二〇一六）。三軒屋遺跡の八角形建物については、仏教思想・仏教政策や佐位郡と中央の采女を通じた関係の影響などが指摘されている。なお、私も先の論文では、鞠智城及び新羅の八角形建物との関連性については上記の通り柱構造の違いから否定したが、視覚的に特異な八角形を利用した構造は何らかの設計図がなくては建設が困難であるため、心柱がなくとも朝鮮半島（新羅）の影響を考慮すべ

きではないかという方に見解を改めたく思っている。日韓における発掘の類例がもう少し増えるのを待ちたいが、ともあれ法倉及び八角形建物は佐位郡家（三軒屋遺跡）のランドマークであったと考えられる。この点を補足すれば、正倉に向かい版築状の盛土をともなった道路遺構が発掘されていることも、そのような性格を垣間見せる。

近年、大橋泰夫氏は、全国の郡家正倉に対し考古学的（建物の規模・構造、年代、配置、景観、瓦葺の有無）に限なく精査し、そのなかでいかなる特徴を有した倉が法倉になり得るかを体系的に定義づけている。氏を中心に執筆された『古代日本における法倉の研究』は、日本古代の法倉の実態・性格を論じた専論であり今後の指標になると思われるので、その一部を要約紹介すれば次のようである。

「郡衙正倉群の中には一棟ないし二棟程度、超大型の総柱建物が含まれる例があり、その倉が法倉とされ、収められた稲穀は高年者や貧民・難民を救済するために使われた。下野国（那須官衙遺跡・長者ヶ平官衙遺跡）や常陸国（台渡里官衙遺跡）などでは、柱を丹塗りした瓦葺建物もみつかった。正倉を瓦葺きとするのは、陸奥国と隣接する北関東の郡衙における地域的な特徴といえる。加えて、上野国の三軒屋遺跡で見つかったような八角形建物（八面甲倉）も法倉とみられる。そしてそれらは、官道側に向くなど目立つように景観を考慮している例が多い。……ただ、大型でなくともいち早く建てられた礎石建物・基壇を持つ高床倉庫も法倉であった可能性がある。……こうした法倉は、八世紀前半（七世紀代に遡る例はない）から建設が始まり、国家の威信や支配の正統性の誇示において直接役割を担った。なお、一般的な正倉の礎石化は八世紀後半からであった。（大橋ほか二〇一二）」

上記のように三軒屋遺跡以外にも、八世紀前半～中葉の北関東の郡家跡には正倉の中心に法倉が建設され、さらには一層荘厳な礎石瓦葺建物、瓦葺丹塗建物の存在が確認されている。このなかで、那須官衙遺跡（栃木県那須郡那珂川町）の総瓦葺丹塗建物について簡単に述べれば次のようである。なお北方約四kmには、後述の那須国造碑が存在する。

「遺跡の最も高所にある西ブロック内部には、TG一六一（瓦葺丹塗建物）に代表される礎石基壇建物化が八世紀中頃以降進められ、周辺の状況から二時期ほどの先行する掘立柱建物の存在が想定されている。……TG一六一は、旧地表面上を搗き固めた上面にローム土を盛った基壇上に建ち、衍行六間、梁行二間の南北棟である。……四方には落下した状態で瓦が出土し、すべての宇瓦顎部には赤色顔料が付着する。……TG一六一は本遺跡中唯一の瓦葺であると共に丹塗建物であるから、建物の性格については、政庁とする意見もあったが倉と推定されている。また桁行九〇尺、梁行三〇尺という大型の建物規模であるから、法倉と考えられている。（眞保二〇一三）」

加えて最近では、下野国・常陸国に加えて、上野国の多胡郡正倉跡（群馬県高崎市）でも荘厳な礎石瓦葺建物（三×七間）の法倉が発見されている。多胡郡は和銅四年（七一）に新設され、ここから南四〇〇mにその建郡碑である多胡碑が存在するが、出土瓦は八世紀前半の年代であり両者の関係が一致している（高崎市教育委員会二〇一六）。

このように辺要地域（陸奥）並びに隣接する地域（北関東）でいち早く導入された瓦倉・瓦葺建物の効用については、外国使節の通

る山陽道駅家への「瓦葺粉壁」や陸奥国の郡家（根岸遺跡・関和久遺跡など）及び周辺寺院（夏井廃寺跡・借宿廃寺跡など）での同範瓦群の出土量、瓦葺の採用率の相当な高さを念頭に、国家的威信を示す視覚的側面が強調されている（大橋一九九九、川口二〇一一、眞保二〇一三など）。例えば、蝦夷経営との関係から概ね次のような説明がなされている。

「陸奥国で成立した寺院・郡衙への瓦葺が東山道や東海道で接する下野や常陸国でも採用された背景には、養老四年（七二〇）の蝦夷による按察使上毛野朝臣広人の殺害による石背・石城国の陸奥国再編があげられる。さらに天平期（七二九）には現在の関東に所在する国々を坂東諸国として一体的に把握する陸奥国支援策・蝦夷対策がはかられるようになるが、これらの具体的な対応として郡衙への瓦葺きの採用があり、政治的な道具として交通路や河川を意識した位置での造営が考えられよう。（眞保二〇一三）」

以上、八世紀に入り大宰府管轄の古代山城に建設された長倉との類似性に着目して、同時期の北関東の郡家正倉でシンボリック的存在として登場した大型の礎石総柱瓦葺（中には丹塗瓦葺も存在）建物の事例をいくらか紹介した。さらには、蝦夷対策を含む北関東（古代東国）の担った地域的役割も考慮しながらそうした法倉（長倉）の役割を言及してみたが、北関東の例は、九州の古代山城の長倉の建設背景並びにその役割・機能にも通じるものと考えられる。加えて、それらと類似する長倉が、次章で論じるように七世紀中葉～八世紀の新羅の山城において文献史料からも遺構からも直接確かめられるのは注目される。

そこで想起されるのは、九州と北関東では一見全く異なる地域であったが、両地域ともに新羅系を中心に渡来人が多数移住させられ定住していたことである。次の『日本書紀』などの記録は、古代東国と半島からの渡来人（特に旧高句麗人と新羅人）の関わりを物語っている。

天武一三年（六八四）五月化来した百済の僧尼及び俗の男女二三人を皆武蔵国に安置す。

持統元年（六八七）三月投化の高麗人五六人を以て常陸国に居らしむ。田賦と稟を受けて生業に安からしむ。

同年三月投化した新羅人一四人を以て下毛野国に居し、田賦と稟を与え生業に安からしむ。

同年四月筑紫大宰、投化した新羅の僧尼及び男女二二人を献る。武蔵国に居らしむ。田賦と稟を受け生業を安からしむ。

持統二年（六八八）五月百済の敬須徳那利を以て甲斐国に移す。持統三年（六八九）四月投化した新羅人を以て下毛野に居らしむ。

持統四年（六九〇）二月帰化した新羅の韓奈末許満ら二二人を以て武蔵国に居らしむ。

同年八月渡来した新羅人らを以て下毛野国に居らしむ。

霊龜二年（七一六）五月駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人一七九九人を以て武蔵国に遷し、始めて高麗郡を置く。

天平宝字二年（七五八）八月帰化新羅僧三二人、尼二人、男一九人、女二一人を武蔵国の閑地に移す。ここにおいて始めて新羅郡を置く。

上の記録からも六八七年以降はほとんど新羅人の移住記事である

が、特に下野国への例が多いようであり近年の考古学の成果によっても、西下谷田遺跡（栃木県宇都宮市）では七世紀末～八世紀初頭の遺構から一〇点以上の新羅土器が出土している。この中の二点の甗を通して<sup>(七)</sup>、この遺跡の新羅人が日本渡来後直ちに政府により振り分けられ移住してきたことも指摘されている（酒寄二〇〇九）。

さらに古代東国地域での新羅系を中心とする渡来人の活動・役割は、考古学・文献史学両者の立場から具体的に解明されつつある（亀田二〇一二、眞保二〇一三、荒井二〇一五など）。特に注目してみたいのが、前述の下野国那須官衙遺跡周辺の新羅人が作成に関与したことが指摘されている『那須国造碑』である。端正な楷書で計一五二字記された碑の内容は、「永昌元年（六八九）己丑四月に那須国造であつた那須直韋提が評督に任じられ、庚子年（七〇〇）に亡くなったので、意斯麻呂らが碑を建てた」とするものである。その碑を記した人物が新羅人であつたことは概ね次のような視点から指摘されている。

「方柱状である碑石の形状は中国に遠源が求められ、碑文の内容も、忠孝思想と治民志向を和式漢文でありながら四六式の漢文をも用いて染筆する学力と、永昌という中国周（則天武后）の年号を用いるなど中国状況に精通する。作成者は高度な文化・技術を有していた渡来人といえるが、六八七・六八九・六九〇年に新羅人の下野国・武蔵国など東国移住記録があり、さらにその中に僧侶や旧官人が含まれていたことが知られる。加えて、那須官衙遺跡（那須評家）の北一kmに位置する付属寺院の浄法寺廃寺などからも、新羅系の瓦が出土している。（酒寄二〇〇九）」

つまり、那須地方に文化・技術面に秀でた新羅人がいたことを知らせるが、今泉隆雄氏が指摘するように那須国造碑を作成した人物は、持統四年（六九〇）二月一日に「新羅沙門詮吉・浪級北助知等五十人帰化」と記録があるのに続き、同年二月二五日に韓奈末許満ら一二人を武蔵国に移し八月に新羅人を下野国に移したとあるので、新羅沙門詮吉や浪級北助知らであつたとみられる（今泉一九八八）。ともあれ、これらの地方行政に関与した新羅人には、新羅沙門や韓奈末（新羅官位一七のうち一〇階大奈麻）・浪級（同九階の級伐浪）をもつ旧新羅官人が含まれていたことが窺い知られる。さらに、下野国の国家的事業である薬師寺造営にも新羅人の関与が指摘されており（酒寄二〇〇九）、上野国の多胡碑並びに一昨年に法倉が発見された多胡郡一帯でも新羅人を中心とした渡来人の高度な活動が報告されている（土生田ほか二〇一二）。彼らの集団規模も、七十六年五月の高麗郡設置、七五八年八月の新羅郡設置からわかるように、郡レベルになりえるものであつた。

このようにみれば、最先端の諸技術・文化を伝播すべく旧新羅官人を含む渡来人を北関東に移したのは、律令国家建設期のその地域に対する中央政府の意思表示でもあつたと考えられる。そうした新羅人たちも、他地域の場合より一層能力を発揮することが可能であり、地方行政にまで携わつていたことを想定できる。東国諸郡の稲穀、すなわち正倉が蝦夷支配の拠点である多賀城・陸奥国の経営をバックアップしていたことは既存の多くの研究で説かれているが（平野一九九六、山路二〇一四）、そうした重要施設の設計には那須国造碑を作成したような新羅人を登用することもあつたのではない。当地域を象徴する建造物の法倉（長倉）には、一際最新の諸

技術・文化的影響が投影されていたと推察されるのである。したがって、仮に大宰府管理の古代山城に新羅の都城・山城にみられる長倉の影響があるとすれば、新羅人の関与が推定される北関東の長倉（法倉）と構造・役割の面で類似した施設になるのは、ある意味自然なことといえる。ともあれ九州の古代山城及び北関東の長倉（法倉）の実体を明らかにするためには、新羅の同時期に建造された山城の倉庫群との比較検討が必要であることを物語る。

## 二・新羅文武・神文王代の山城建設とその倉庫―日本古代山城、鞠智城との関連性を探る―

新羅は、唐と連合し百濟（六六〇年）、高句麗（六六八年）を滅ぼし、唐との戦争（羅唐戦争）を経て、六七六年に唐を朝鮮半島から追い出し統一した。統一を達成した文武王（在位六六一―六八一年）、次の神文王代（六八一―六九二年）までは、新たに領域化した地域をまとめて唐に対抗するため、集権的諸政策の実現に従事した時期であった。国家再編への大きな柱は都城の整備と地方統治体制の確立であったが、軍事・官僚・身分制度から仏教・祭祀にいたるまで、諸改革が実施されたのであった（李基東二〇〇一、李成市二〇〇四など）。特にこの時期、王都から地方まで山城をコアとする防衛体制を整え唐に勝利し、その後もそれを拠点に統治体制を築いたことは注目される。結論から述べれば、この頃の新羅で山城内に長倉及び倉庫群を築いた記録がまとまって登場するのは、決して偶然でなく集権体制整備に向けた一環であったとみられるのである。ここでは、大宰府による山城経営、倉庫群建設の意義を考えるための比較資料として、比較的同時期の新羅山城の倉庫群について簡単に検討

してみたい。

### （一）慶州都城の山城整備と長倉・倉庫の建設

日韓の都城史研究では、日本の最初の本格的王都である藤原京は遣唐使の派遣されることのなかった時期に造営されていることから、そのプランも新羅都城をモデルに造営されたとする見解が随所に出されている（山中章二〇〇一、梁正錫二〇〇八、朴方龍二〇一三、林部二〇一四など）。これについては、日本が目指した理想の都城観念は新羅のその形態・設計原理には合致しなかったとして否定する見解もみられるが（小澤二〇一一）、当時の日本に新羅都城の情報が十分伝わっていたことは明らかだろう。ところで、多かれ少なかれ当時の日本が参照した新羅の王京は、統一期に文武王により強力なリーダーシップのもと改造された王都であった。国立慶州文化財研究所などによる約二〇年にわたる調査によつて、統一期に至り条坊制が東西（兄山江から狼山の西側に至る約五km）南北（蘿井から龍江洞北部までの約八km）に施行されたことが確認された。この時成立した王京は、慶州は新羅建国以来千年の都といわれるが、身分制・官僚機構など諸改革を断行し六部のような地縁集団を越えた集権体制の確立をめざした文武王により構想された造営プランであったといえる。

さて現在慶州には、宮城（月城）を除くと第1表にみられる一一カ所（表では明活土城と山城を分けた）の山城が存在するが、新羅都城は山城が取り囲むように形成されている。

こうした王都の防衛体制は、次の史料のように、  
秋七月築南山城、周二千八百五十四步。（『三国史記』真平王三三年（五九一）秋七月条）

十五年秋七月、改築明活城、周三千歩。西兄山城周二千歩。（『三  
国史記』真平王一五年（五九三）秋七月条）  
築高墟城。（『三国史記』真平王四八年（六二六）八月条）

第1表 新羅都城を囲む山城一覧

城郭名	築城年	増改築年	規模（周囲）	素材
都堂山土城	?		約 1 km	土城
南山土城	591 年以前		約 1.2 km	土城
明活土城	405 年以前		3.6 km	土城
乾川鵲城	5 ～ 6 世紀		2.1 km	土城
良洞里山城	5 ～ 6 世紀		0.9 km	土石城
明活山城	551 年		4.5 km	石築
西兄山城	593 年	673 年	2.9 km	石築
南山新城	591 年	663 年 679 年	4.9 km	石築
高墟城	626 年		約 3.6 km ?	石築
北兄山城	673 年（ただ、少々遡 る出土遺物あり）		0.9 km	土石築
富山城	663 年		9.4 km	石築
関門城	722 年		12 km	石築
毛伐郡城 新垆里城	7 世紀後半		1.8 km	石築

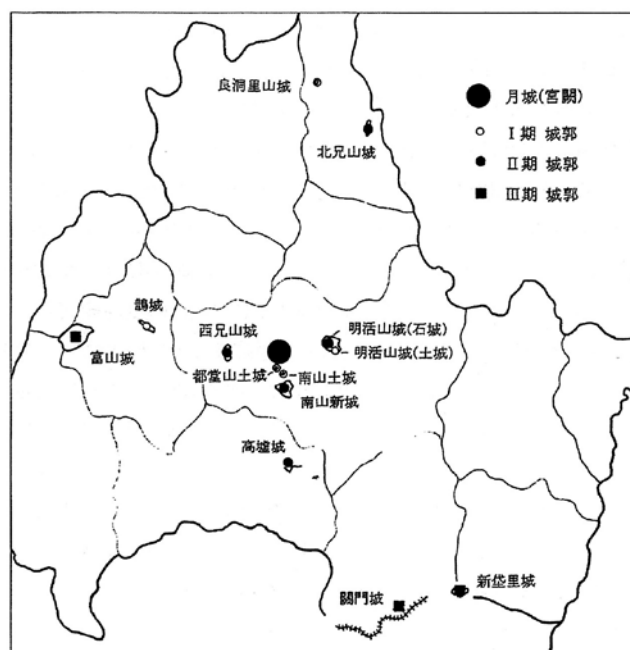
南山新城・西兄山城・高墟城の築城と明活山城の改築を行った七  
世紀頃の真平王代には誕生していたと考えられている（姜鍾薰  
二〇〇六、李文基二〇〇九、朴方龍二〇一三など）。特に南山新城  
は、その場で発見された「南山新城碑」（第一一〇碑）の各冒頭  
に「辛亥年二月廿六日南山新城作節如法作後三年崩破者」という記

録がみられ  
ることか

ら、築城年  
代が辛亥年  
（五九一）  
と特定でき  
るだけでな  
く、三年以  
内に城壁が  
壊れたら法  
にもとづき  
罪を受ける  
という強い  
誓事のもと  
広範囲の地  
域民が動員  
されていた  
様子が知ら  
れる。これ  
らは、領土  
拡大を実現  
した真興王  
を引き継い  
で、国内の  
政治制度を  
一新し諸官  
制を整備し  
た真平王の  
威信を示し  
ている（朱甫  
暉二〇〇二  
など）。

とはいえ留  
意しておき  
たいのは、  
第1表並び  
に次の史料  
下線部から  
わかるよう  
に、

三年春正月、作長倉於南山新城、築富山城。（『三国史記』文武王  
三年（六六三）春正月条）  
二月増築西兄山城。（『三国史記』文武王二三年（六七三）二月条）  
九月、築国原城・北兄山城・召文城・耳山城・首若州走壤城・達含  
郡主岑城・居烈州万興山城・歆良州骨争峴城。（『三国史記』文武



第3図 新羅都城を囲む山城分布図



王十三年（六七三）九月条）

増築南山城。（『三国史記』文武王十九年（六七九）秋八月条）

冬十月・・築毛伐郡城、以遮日本賊路。（『三国史記』聖德王二二

年（七二二）冬十月条）

王都を取り囲む防御体制の代表格である南山新城・西兄山城（増築）、富山城・北兄山城（新築）などの山城施設の建設は、羅唐戦争前後（大部分は目前）の時期であったことである。最重要の南山新城に大規模増築された倉庫群の実体は後述するが、富山城と北兄山城の築城も新羅都城の防御体制において相当な比重を占めていたと思われる。まず富山城の地は、善徳女王代（六三二～六四七）には下線部のように、

王急命角干闕川弼吞等、鍊精兵二千人、速去西郊、問女根谷必有賊兵、掩取殺之。二角干即受命、各率千人問西郊富山下、果有女根谷百濟兵五百人、来藏於彼、並取殺之。（『三国遺事』紀異第一・善徳王知幾三事条）

度々百濟兵が潜むことがあったようであり（善徳王はこれを察知し対処したが）、防御施設が存在せず不測の事態に陥りやすかったといえる。次に北兄山城は、北から兄山江を利用して攻めてくる際にはその砦となる場所であった。慶州における北兄山城の立地・役割についてはこれまでさほど取り上げられなかったが、最近李相勲氏は、羅唐戦争時には王都に入る唐軍の進路として最も予測される山城と再評価している。氏はさらに、北兄山城の建設には、六六〇年の百濟滅亡の際に唐軍が錦江を利用して泗沘都城（扶余）を攻撃し

僅かのうちに陥落させたことを教訓

に、兄山江を意識していたとされる（李相勲二〇一六）。いずれにしても

富山城と北兄山城の築城は、のちの関門城（毛伐郡城）を加えれば西・北・南への外郭城設置を意味しており、新羅都城の防御体制の成熟過程を示している。いわゆる第4図（朴方龍二〇一三）の新羅都城の防御体制（慶州の王京と山城）の確立は、羅唐戦争前後の集権体制の整備、都城の形成と軌を一にしていたのであった。

さらに注目したいのは、そうした山城増改築に合わせて城内に礎石式瓦葺

の長倉・倉庫群が建設されていることを、文献からも考古学・現地調査からも直接確かめられる点である。関連史料としては次のようである（①②③④⑤が南山新城、①⑥が富山城、⑦が西兄山城）。

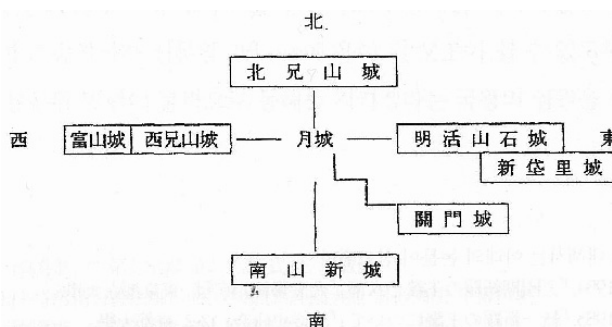
①三年春正月、作長倉於南山新城、築富山城。（『三国史記』文武

王三年（六六三）春正月条）

②王初即位置南山長倉、長五十步広十五歩貯米穀兵器。是為右倉。

天恩寺西北山上、是為左倉。別本云、建福八年辛亥築南山城、周二千八百五十歩。則乃真徳王代始築、而至此乃重修爾。又始築富山城、三年乃畢。（『三国遺事』紀異第二文虎王法敏（文王）条）

③及太宗大王即位、唐使者至伝詔書。其中有難読処、王召問之、在王前、一見説釈無疑滞、王驚喜。……王曰、見卿頭骨、可



第4図 羅唐戦争期の新羅都城を囲む山城

称強首先生。使製廻謝唐皇帝詔書表、文工而意尽、王益奇之、不称名、言任生而已。強首未嘗謀生、家貧恰如也。王命有司、歲賜新城租一百石。文武王曰、強首文章自任、能以書翰致意於中国及麗濟二邦、故能結好成功。（『三国史記』列伝第六強首条）

④時大王謂夫人曰、今中外平安君臣高枕而無憂者、是太大角干之賜也。惟夫人宜其室家儆誠相成陰功茂焉。寡人欲報之德、未嘗一日忘于心。其餽南城租每年一千石。後興德大王封公為興武大王。（『三国史記』列伝第三金庾信条）

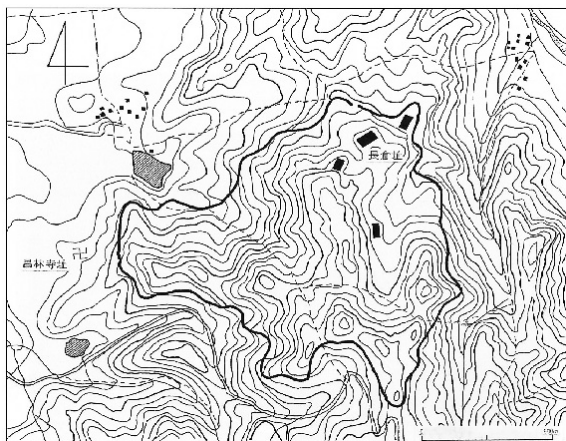
⑤七月三日、大恭角干賊起、王都及五道州郡并九十六角干相戰、大乱。大恭角干家亡、輸其家資宝帛于王宮。新城長倉火燒。（『三国遺事』紀異第二惠恭王へ在位七五八〜七八〇年条）

⑥第三十二孝昭王代、竹曼郎之徒、有得烏一云谷級干。隸名於風流黄卷、追日仕進。隔旬日不見。郎喚其母、問爾子何在。母曰、幢典牟梁益宣阿干、以我子差富山城倉、宜馳去。行急未暇告辞於郎。……郎徒百三十七人亦真儀侍從、到富山城。問閤人得烏失奚在。人曰、今在益宣田、隨例赴役。郎歸田。以所將酒餅饗之、請暇於益宣將欲偕還、益宣固禁不許。時有使吏侃珣、管收推火郡、能節租三十石、輸送城中。美郎之重士風味、鄙宣暗塞不通、乃以所領三十石、贈益宣助請。猶不許、又以珣節舍知騎馬鞍具貽之、乃許。朝廷花主聞之、遣使取益宣、將洗浴其垢醜。宣逃隱、掠其長子而去。時仲冬極寒之日、浴洗於城內池中、仍合凍死。大王聞之、勅、牟梁里人從官者並合黜遣、更不接公署。不著黑衣。……因名竹旨。壯而出仕、与庾信公為副帥、統三韓、真德太宗文武神文四代為冢宰、安定厥邦。初得烏谷慕郎而作歌曰。（『三国遺事』紀異第二孝昭王代へ六九二〜七〇二竹旨（曼）郎）

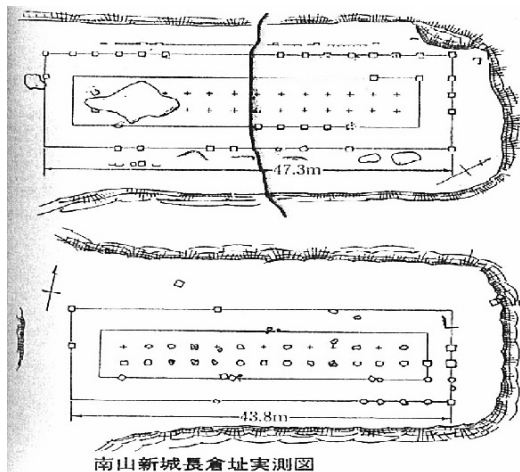
⑦夏六月、西兄山城塩庫鳴声如牛。（『三国史記』哀莊王一〇年（八〇九）条）

①によると、文武王は六六一年に即位すると当初の六六三年から、南山新城の城内に長倉の増築と富山城の新築をセットで実施しているのがわかる。なお両者は、同じ設計プランにもとづいていたと思われるので、この時富山城にも長倉が作られた可能性は高いとみられる。より具体的な記録である②には、上の南山新城の長倉の規模・様相・立地を詳細に記しているが、「規模は長さ五〇歩・広さ一五歩で、機能面としては米穀・兵器を貯えていた」とされている。さらに右倉・左倉の記録がみられ、長倉を右倉とみなすか天恩寺西北の左倉を加えた左・右の倉庫群とするかなどで解釈の違いはあるが、右倉や左倉という具体的な倉庫が存在していたこともわかる。こうした文献の南山新城の倉庫跡については、朝鮮総督府主導で植民地期の一九三〇年代より実測調査が行われ、現在でも図のように城内北よりの場所に三カ所の大きな倉庫跡に利用された礎石を確認できる。

これらは、一九三一年に藤島亥治郎氏が、一九四〇年には小場恒吉氏が実測図

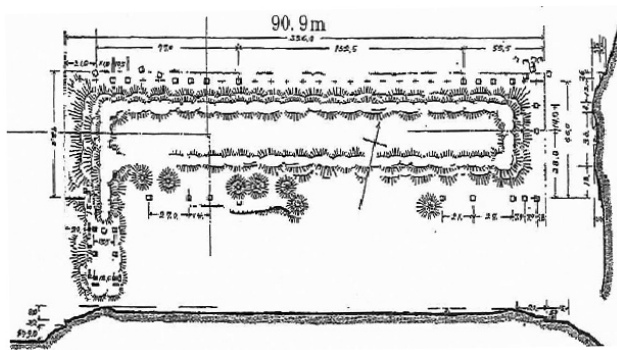


第5図 南山新城平面図並びに倉庫跡



第6図 東側倉庫跡上段・西側倉庫跡下段

いる小場一九四〇、東一九八八、朴方龍二〇一三をもとに簡単に紹介しておく。なお、第5図の三力所の倉庫跡は、史料②のように右倉・左倉ではなく、便宜上東から東側倉庫跡（最も上段）、中倉跡（中段）、西側倉庫跡（下段）とする。



第7図 中倉跡

●中倉跡（小場一九四〇〈建物  
の長さは加筆〉）  
「三倉のうちで最大規模をほこる。幅二三m、長さ一〇七mの土石壇をつくり（西側の石築壇の一部は今も約一m残存するが、横九三cm・縦二八cmの長方形石築を三段積んでいる）、その上に礎石をならべる。礎石の多くは消失しているが概ね五×二八間で、建物の大きさは正面約九〇・九m・側面約一九・六m規模であったと推定される。」

●東側倉庫跡（実測図上段・東一九八八〈原著は小場一九四〇〉）  
「城壁の東北隅にあり、斜面を削平し、切り石で幅一七m、長さ五〇mの長方形の土石壇をつくり、その上に礎石を置く。建物の正面の大きさは約四七・三mで、五×一七間である（一八個の方形礎石が六列に並ぶものと推定。柱間距離は外側約三・六m・内側約二・七m）。瓦の破片が多数確認されている。」  
●西側倉庫跡（実測図下段・東一九八八〈原著は小場一九四〇〉）  
「三倉のうちで最高処にあり、土壇をもうけず礎石をならべる。東倉址よりやや小さく、幅一五m、長さ四五mである。建物の正面の大きさは約四三・八mで、五×一六間である（柱間距離は外側約三・七m・内側約二・七m）。瓦の文様から文武王代建設の二倉より少し後代とする見解もある。」

並びに復元図・該当写真を公表したが、それ以降本格的な調査・研究は行われてこなかったようである。ところが、一九八〇年代後半に東潮・田中俊明氏が南山を含む慶州をメインに置く著書を刊行した頃から韓国でも再度注目されるようになり、崔珉熙二〇〇五、盧ヒョンギン二〇〇八、李ドンジュ二〇一〇、朴方龍二〇一三など個人的な論考はもとより、国立慶州文化財研究所から南山全体の遺跡の地表調査を実施しまとめられた本格的な報告書（二〇〇四『慶州南山精密学術調査報告書』）が刊行され、さらには入手困難な植民地期の資料書籍を再整理した報告書（国立文化財研究所建築物研究室二〇〇五、国立中央博物館二〇一五）も出されている。特に李ドンジュ氏の研究は、既存の諸研究を丁寧で紹介・検討し建築史の立場から新たな復元図を提示しているので、今後の指標になると思われる。ただし、私は建築の分野は全くの門外漢であるため、ここでは三力所の倉庫跡について、現在まで通説となっている小場一九四〇、

三〇cmの大型の蓮花文軒丸瓦をはじめ多数瓦が出土しており長大な大型瓦葺建物であった。この場所からは多くの炭化米が発見されているため、食料を貯蔵した倉であったといえる。また、火災の痕跡もみられる。近年の調査では、内部に土壁を積み上げたような跡、大壁が確認されている。」

加えて詳細は窺うことができないが、これらの倉庫跡のほか、兵舎とみられる建物跡二カ所、望楼跡五カ所、門跡二カ所、北水門などがあるとされる（朴方龍二〇一三）。

ところで、前述のように史料②の右倉・左倉を現存するとの礎石跡に比定するかで見解の相違がある。一般的には東側倉庫跡を右倉、西側倉庫跡を左倉とし、中倉跡は⑤のような長倉とみる見解が通説であった（東一九八八、朴方龍二〇一三）。特に朴方龍氏は中倉跡の建造を、壇の石築技法からみるに六六三年の右倉・左倉よりやや後代であろうと説く。この朴氏の見解は、王都山城の荘厳な長倉を集権体制整備と絡めた王権・国家の財政運用面からの検討の必要性を示唆しており、本稿の後述の内容とも関わる。だが近年むしろ主張されているのは、②の史料中に右倉の内容が細かく記されるのは長倉の中でもそれがメインであったからであり、それは当然最も長大な建物に比定されるべきとする考えである（崔珉熙二〇〇五、李ドンジュ二〇一〇）。すなわち、中倉跡を右倉、東側倉庫跡を左倉、西側倉庫跡をその他（若干新しい長倉）とみなすようである。

ともあれ、六六三年の長倉建設にはじまる南山新城の増築事業は、前述の史料のように六七九年にも実施されていて相当な規模であったといえる。さらに言えばこの場所に置かれた米穀や兵器の長

倉は、唐に対抗すべく集権体制の強化をめざした文武王が即位とともに建設していることを考えると、新羅において山城の長倉が果たす役割は極めて大きかったのではなからうか。この長倉の機能面については、③や④などの具体例から再度考えてみる。

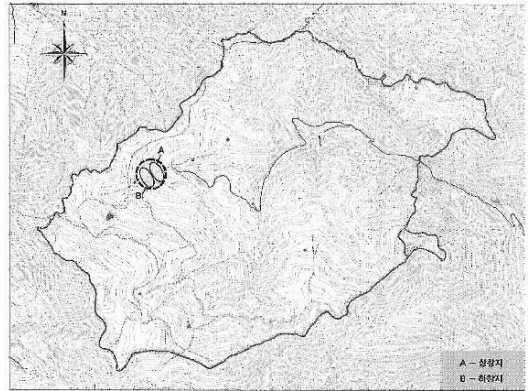
また史料①・⑥の記録からは、同時期の富山城にも長倉が建設されていたことを確認できる。なお富山城並びにその倉庫（長倉）は、朝鮮時代の例であるが次の史料などに軍倉として利用されていたことが度々みられることから、

夫山石城、在府西三十二里、周回二千七百六十五步三尺、内有川四池一井泉九、又有軍倉、永川迎日軍倉併入置。（『世宗実録地理志』慶州府・夫山石城）

富山城、在府西三十二里、文武王三年癸亥築石城、周三千六百尺高七尺、今半頽圯、内有四川一池九泉、有軍倉今廢。（『東京雜記』城郭）

後世まで活用されていたことがわかる。詳細は触れないが後代の遺物も多く、朝鮮王朝にいたるまで慶州一帯をまもる重要な拠点であったといえる。

富山城は、慶州市内から一km西方の朱砂山（海拔七二九m）を中心として三つの谷をとりこんだ包谷式山城で、前述のように新設された王都の外郭城であった。城内は平坦で、水量も豊富であり現在も民家や牧場がある（城内に平坦地がみられる様子は鞠智城にも通じる）。この城は、古く植民地期の一九二〇年代から谷井清一を団長に現地調査がなされているが（朝鮮総督府一九四二）、本格的な発掘調査は一九七八年の国立慶州博物館・慶州史跡管理事務所



第8図 富山城倉庫跡

によってである。その後も新たな地表調査の成果が出されていて（朴方龍一九八五、東一九八八、鷄林文化財研究院二〇一二）、周辺に瓦片が多く楼門と推定される正門の南門跡をはじめとする四力所の城門跡、望台跡・倉庫跡など建物跡六力所、井戸四力所、池二力所、暗門跡一力所、雉城二力所などが確認されているという。民家の

の東側にある建物跡がまさに倉庫跡と考えられており、図のように上・下に二段（A・B）上倉と下倉が造成されている。

富山城の長倉・倉庫跡について、これまでの成果を概観すれば次のようである。

「上段の建物跡（上倉）は、民墓が位置し土砂が覆われて確実な建物の構造と規模はわからないが、民墓の間に八〇×六五cm内外の自然石を利用した礎石三個残っていて、下段の建物跡（下倉）との比較検討から下段と同じく倉跡と判断される。下段の建物跡（下倉）は、上段に比べて台地面積はやや小さいものの礎石は十分保存されている。六列に並ぶ礎石は正面一一間・側面五間であり（礎石の間距離は、外側約三・四m・その他は約二・三m）、その規模が南山新城の西側倉庫跡に類似する様子がわかる。加えてこの場所からは統一新羅時代の瓦片が多く発見されており、南山新城と同じく二五cm以上の大型蓮華文円瓦当も収集されている。」

以上のように、富山城にも一一×五間で南山新城と同規模の大型瓦葺礎石建物の長倉が存在した。また⑦によれば、建設年代は定かでないが西兄山城に塩庫が存在したことも確かめられる（朴南守一九九六）。さらに⑤をみると、恵恭王三年（七六七）七月、大恭角千の乱（『三国史記』では同王四年とする）の際に南山新城の長倉が火災により焼けたとある。国家的な反乱において山城の長倉が狙われている点も興味深いが、文武王代に都城整備と合わせて作られた山城内の長倉は、少なくとも八世紀後半まで確実に機能しており最重要施設と認識されていたことが窺い知られる。それでは、上の史料から一層具体的に新羅の長倉の役割・機能についてみていくことにする。

まず、王都を囲む山城の機能を唐との戦いにおける籠城用などの防御施設とのみ考えれば、前述の長倉に収蔵された稲穀・塩や武器などは、唐との戦いを中心とする戦闘用の備品・備蓄品と考えられよう。しかしながら僅かばかりの例ではあるが、実際に長倉の活用例が記されている③・④・⑥によるかぎりそうした側面は全く窺うことができない。その内容を簡単に述べれば、③は、王が担当官庁に命じて唐との詔書のやり取りで文筆の功のあつた強首に毎年新城租一百石を賜うという内容である。そして何より④は、文武王が金庚信（五九五〜六七三）死後に彼の功績を称えて、自ら夫人に毎年にわたり南山新城の租一千石を送ると約束する場面である。こうした内容は既存の研究でも注目され、山城倉庫の稲穀・租は王京内の倉庫と同様に役人の給与などにも利用されたという指摘もある（李弘植一九九一、金鎬詳二〇〇九）。ただし、④の租千石というのは膨大な量であり、両記録とも日常的な例というよりは、新羅の最重要

人物である金庾信や対唐外交関連など特殊な例であったといえる。

とはいえ、③・④を通して、六六三年に建設された山城長倉の稲穀が軍事防衛以外で利用されていたことを知りえた意義は大きい。こうした特別な事情の際に山城の稲穀を利用することは、同じく長倉が存在した基肄城の「稲穀班給木簡」の内容にも通じるのである。

加えて⑥は、三国統一の功臣であった竹旨（曼）郎を偲んで記された長編の史料であるが、この中に倉庫をとりまく富山城内の様相並びに長倉（倉庫）物品の運搬形態を直接伝える重要な記録が存在する。関連部分を中心に史料の要旨は次のようである。

（１）竹旨郎の花郎の得鳥が、牟梁部の益宣阿干から富山城の倉庫での勤務を命じられると、急であつたため竹旨郎にも告げず富山城に向かい、城内に滞在する。

（２）これを聞いた竹旨郎は、得鳥を引き帰らせるために交渉しようとして、一行を引き連れて富山城に向かう。城に行き門番と対話すると、得鳥は牟梁部益宣の田に労役に出ていることを告げられる。

（３）竹旨郎は益宣の城内の田に出かけ、得鳥の帰宅を益宣に交渉するも拒絶される。

（４）この時、使吏の侃珙が推火郡の租を富山城内に運搬してきた。侃珙も竹旨郎の意見に同調して、益宣に得鳥の帰宅を進言するも一度目は断られる。二度目に、侃珙の従者（舍知）の乗馬と鞍まきで益宣に差し出し、それでようやく要望が通った。

（５）以上の事情を聞きつけた朝廷の花主は憤慨し、牟梁部の益宣一族を取り押さえ、富山城内の池で一月の極寒日に贖罪の水浴びを行わせようとした。しかし、益宣らは逃亡して捕まえることができなかった。

（６）こうしたことを知った新羅国王は、益宣はじめ牟梁里（牟梁部）の人々を公職の場から追放するようにした。なお、租を富山城内に運搬した際に得鳥の帰宅に尽力した侃珙一族は代々登用することにした。

（７）三国統一の功臣であつた竹旨郎を偲び得鳥が郷歌を作る。

上の要旨に対し既存の研究では、史料⑥点線・要旨（６）にみられる支配階層の六部のひとつ牟梁部が没落したことに焦点を合わせ、統一期（七世紀後半）新羅の集権体制強化と絡めて説明されてきた（金昌錫二〇〇一・二〇〇四）。すなわちこれまで牟梁部が管理してきた富山城の財源は、この時期を前後に朝廷の財政基盤に編入され、政府の直接管理下に移ったという主旨である。ただし、（４）のように租税を運搬してきた使吏侃珙の従者は舍知という京位を有していることから、この時以前から朝廷が山城の倉庫管理を主導しつつあつたことも指摘されている。ともあれ、⑥の内容を通して、

文武王代の王都防衛事業の骨格として建設された富山城及びその倉庫（考古学的調査で明らかでない一×五間の長倉）にて、主体には牟梁部・王室の両面を想定できるものの、王都から公事なり私用で遣わされてきた役人らが勤務する日常を窺い知られる。城内には門番も常駐しており、現在も牧場の広がる城内では田畑経営などが行われていたこともわかった。また、⑥二重線・要旨（４）により、富山城の財源に推火郡（現在の慶南密陽）の租（税）が直接運搬されていたことが確かめられたが、これは富山城の倉庫（長倉）が租税の運用・管理にも関与していたことを示している。

とすれば、新羅都城を囲む山城内の長倉・倉庫群は、国家財源の

蓄積場の役割・機能の一端を担っていたことになる。これらは、防御用の食糧・武器の備蓄という観点にとどまらず、羅唐戦争前後統一期の集権体制を直接支える施設物であったと考えられる。⑤・⑦のように、政府内の反乱の際に南山新城の長倉が標的にされることや、情勢の悪化にともない西兄山城の塩庫が動揺し鳴くというのも、これら長倉が国家権威の象徴であって多様な機能・役割を有したあらわれであろう。なお、こうした長倉の性格を考える上で、都城の山城で国家祭祀が行われていたことは注目される。『三国史記』雜志祭祀条によれば、南山新城にて「十二月の寅日に新城北門で八楷を祭る」「立夏の後の亥日に新城北門で中農を祭る」とあり、さらに北兄山城（大城郡）は中祀（新羅は名山大川の祭場として大祀・中祀・小祀を設置）に編成されていたことが確かめられる（蔡美夏二〇〇九）。すなわち山城内にはそうした祭祀を行う施設も兼ね備えていたといえ、文武王代における国家祭祀の再編と長倉の建設の関連性まで想起させるのである。

前章では、大宰府のもとにあった大野城・基肄城・鞠智城並びに古代東国（北関東）の郡家に建設された長倉（法倉）・礎石式倉庫群の重要性を指摘し、ここではそれを踏まえて、比較的同時期の新羅都城の山城に築かれた長倉（大型瓦葺礎石建物跡）に目を向けた。これにより新羅山城の長倉こそ、前述したような北関東の法倉以上に、文武王・神文王代に確立される集権国家新羅を象徴する舞台装置であったことを窺うことができた。新羅山城の長倉・倉庫群は、国家的な動揺・危機に際して⑦のように鳴くという異変をあらわしたようであるが、⑦と同様な記録が鞠智城の倉庫（兵庫）記録にみられる点は、両者は国が違えども共通の役割・機能を担っていたこ

とを示唆する。むしろ、日本古代の法倉（長倉）が、新羅のそれらをモデルに建設されたことを一層物語っている。

これにやや補足すれば、統一期の新羅都城の山城では長倉の建設にとどまらず国家祭祀までを執り行っていたが、八世紀の日本古代の山城にもこうした諸機能を垣間見せる記録がみられる。次の『万葉集』によれば、

右、神亀五年戊辰、大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉。于時、勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣大宰府、弔喪并賜物也。其事既畢、駅使及府諸卿大夫等、共登記夷城而望遊之日、乃作此歌。（『万葉集』卷八一四七二番）

神亀五年（七二八）に大宰帥の大伴旅人が、妻の死に際して派遣されてきた勅使の石上堅魚と基肄城を訪れて歌を詠んでいることがわかる。この事例は、古代山城の役割・機能を論ずる際にはほとんど取り上げられないが、基肄城には大宰府のトップが都からの使者を案内できる体制が築かれていたことを伝える。基肄城を訪問した理由も、物見遊山というよりは増改築された新たな城の視察にあったのではないか。大宰府の都城形成に伴いリニューアルされた基肄城・大野城・鞠智城は、大宰府との間で広範なネットワークを展開し、その諸機能の一端を代弁できる施設でもあったと推察される。先の論文で祭祀施設と推定した八角形建物が増築されたⅡ期鞠智城にも（詳細は近藤二〇一六参照）、大宰府官人が度々訪れて、新羅の山城のような祭祀を執り行っていた可能性までを想起させる。したがって大宰府からみて三城は、新羅の都城と山城の關係に極めて似ており、義倉を中心とする食糧と僅かな警備用武器の単なる備蓄

施設という位置づけではなかったと考えられる。

## (二) 新羅における地方山城の大型倉庫跡―広州昼長城(現在の南漢山城)と河南二聖山城を例に―

新羅文武王は、王都並びに周囲の山城整備に加えて、新たに獲得した領土を含めた統治体系・地方制度の整備にも乗り出し(李成市二〇〇四など)、特に唐軍と対峙する地域では既存の山城の増改築とともに大規模な山城(拠点城)を築いた。最も代表的なものは、六世紀中葉に領域化して以降対外的に最重要拠点となった漢山州(八)に築かれた次の昼長城である。

築漢山州昼長城、周四千三百六十歩。(『三国史記』文武王十二年(六七二)八月条)

この時四万もの唐軍が平壤に駐屯していたため、新羅は昼長城をかわきりに翌六七三年八月～九月には、各地に短期間で次の山城を築き、唐との戦争に備えたのである(李相勲二〇一六)。

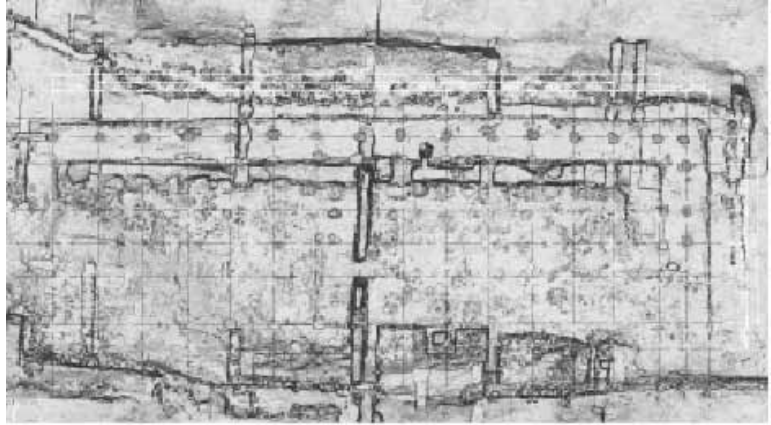
沙熱山城(忠北堤川)・国原城(忠北忠州)・蘇文城(慶北義城)・耳山(主山)城(慶北高靈)・走壤城(江原春川)・主岑城(江原高城)・万興寺山城(慶南居昌)・骨争峴城(慶南梁山)

ただ、『三国史記』にみられる最大規模の山城・昼長城の所在地については長らくの間不明であった。一九九八年より二〇〇八年まで韓国土地住宅公社土地住宅博物館が実施した第一次～八次の南漢行宮跡に対する発掘調査で、ようやくソウル市東南の京畿道広州市に所在する南漢山城であることが立証されたのである。南漢山城は、仁祖二年(一六二四)から仁祖四年の間に築城され朝鮮王朝の

行宮が置かれた場所であるが、自然環境を活かして城壁・施設物が造られており天作之城とも称せられるほどで(詳細は李チヨンウ二〇〇六・二〇〇九参照)、二〇一四年にはユネスコの世界遺産に選定されている。行宮・城の様子は、『世宗実録』地理志京畿(広州)条をはじめ、『朝鮮王朝実録』、『新增東国輿地勝覽』、『大東野乗』、『燃藜室記述』、『重訂南漢志』などの諸史料に記される。

南漢行宮跡に対する報告書は第八次まで完結しているが(韓国土地住宅公社土地住宅博物館二〇一〇)、行宮跡地で新羅時代の痕跡を確認したのは二〇〇三年～四年の六次調査時であった。またこれに合わせて二〇〇五年に中原文化財研究院が実施した城壁跡の発掘調査でも、北門付近から新羅時代の城壁と土器片が発見されたことが報告されている(中原文化財研究院二〇〇七)。こうしたことを受けて実施された二〇〇五年から二〇〇八年にいたる七次・八次調査にて、統一新羅時代の大量の超大型瓦・文字瓦を含む瓦や数点であるが新羅土器の破片などの遺物と大型の礎石建物跡が発見されたのである。この大型建物跡は破壊状況から火災で焼失したとみられるが、建物内部の版築壁に利用された木炭のAMS測定でも、AD五八〇～六七〇・六七〇～八八〇・六五〇～八九〇の年代が提示されたので、六七二年に築城された昼長城であることが一層裏付けられた(ただし、土器の出土が僅かであり詳細な編年は難しいとされる)。報告書により遺跡の状況を補足すれば、以前からこの場所は百済の最初の王都慰礼城とする説があり、一次調査の際にも僅かであるが四・五世紀の百済の住居跡・土器片や高麗時代の遺物も発見されたので、朝鮮時代以前の可能性をも念頭に発掘が進められたという。なお、後述する近隣の二聖山城から出土した七世紀初頭(戊





第9図 南漢山城（昼長城）出土の大型瓦葺建物跡

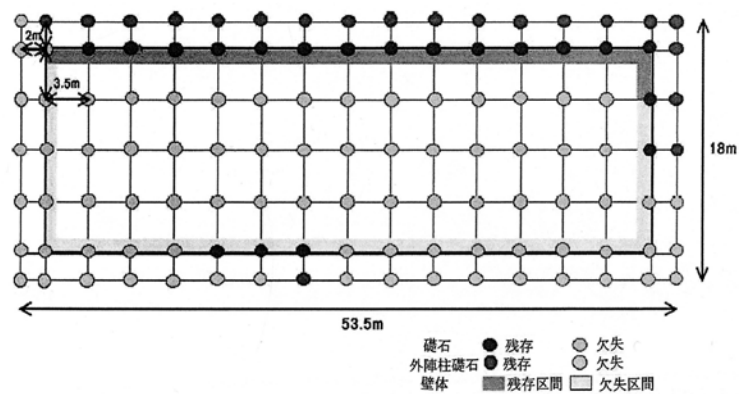
辰年から六〇八年・六六八年の両説があるが、前者が有力)の木簡には「南漢城道使」の記録がみられるが、これは現在の南漢山城（新羅昼長城）の場所とは異なると思われる。<sup>(九)</sup>

さて、上の写真はその大型礎石建物跡の発掘当時のものであるが、それを簡略化した模式図並びに復元案も提示されている（韓国土地住宅公社土地住宅博物館二〇一〇）。

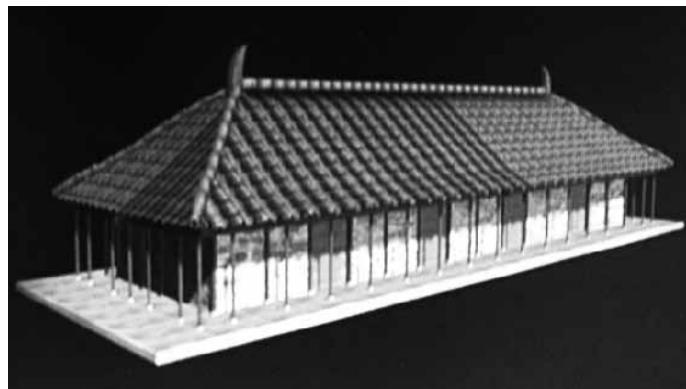
大型建物跡、出土瓦遺物の現況を、報告書の考察編

の盧ヒョンギョン・沈光注・李ヒョンホ・ピョンヘヨン氏の論考により整理すれば次のようである（原文が韓国語であるため最新成果の紹介を兼ねて翻訳した）。

「大型建物跡の規模は、正面一六間・側面六間で長さは正面五三・五m・側面一七・五mであり、新羅国内でも最大規模である。建物跡周辺で発掘された多くの瓦が焼けて赤褐色を帯びていることから、建物は火災により崩壊したと推定される。建物の四方には外陣柱間があり、その内側に厚い壁体を備えた構造である。外陣柱礎石は内陣の部分に比べて約一五cm程度低くなるように位置しており、



第10図 昼長城の大型瓦葺建物跡・模式図



第11図 昼長城の大型瓦葺建物跡・復元図

外陣柱礎石の外側には雨だれが落ちる排水路を作っている。図のように、内陣柱礎石の間隔は約三・五m程度であり、欠損も多いが長さ八〇cm程度の大きさの礎石を置いた、総柱の礎石建物であったと推定される。さらに、建物跡の内陣柱礎石には厚さ二mに達する版築の壁体が築かれている。

崩れた壁体の周辺（建物跡西側、瓦貯蔵所南側及び北側）では統一新羅期の瓦層が五つ（第I層～V層）発見されており、超大型瓦・文字瓦を含む瓦が大量に発見されていて、大型礎石建物跡が瓦葺であることはもとより建物が数回実施されていたことが窺い

知られる。出土瓦としては、長さ六四cm・重さ約一九kgの超大型瓦が三五〇枚も完形で発掘されているが（南漢山城の朝鮮時代の瓦は概ね三・九八kg程度である）、超大型瓦の大半は初期のⅣ層からの出土とみられる。加えて、多数の文字瓦が出土しているが、文字瓦は比較的新しいⅠ層・Ⅱ層からの出土である。具体的には、「甲辰城年末村主敏亮」（この銘が最も多い）「末村主敏亮」「麻山停子瓦草」銘の瓦が多く、「草瓦」「丁巳年」「城」「天主」「白」「香」などの銘もみられる。瓦銘の「甲辰年」は、六四四・七〇四・七六四・八二四・八八四・九四四年が該当するが、建物が崩壊した時期ではないため七六四年又は八二四年のどちらかと推定される。大型瓦から文字瓦の小瓦に変化するの九世紀とみられるため、八二四年の方が一層有力視されるであろう。」

以上から、羅唐戦争前夜の文武王一二年（六七二）に、漢江流域に位置し唐との戦争を勝ち抜く上でも地方統治体制の整備を急



第13図 超大型瓦



第12図 建物跡西側・瓦貯蔵所南側及び北側

いだ漢山州の場所に築いた昼長城には、超大型瓦を敷いた大型礎石建物が築かれていたことを窺い知りえた。大型建物跡は、礎石式総柱と考えられるうえに二mの版築の壁体を備えていることから、報告書や既存の研究では一般的に穀物と武器を保管する軍事的倉庫と推定されている（盧ヒョンギン二〇〇八、沈光注二〇一四）。ただしこうした見解には疑問がないわけではなく、軍事的であれ倉庫に超大型瓦を葺いて荘厳な造りにする理由はないとして、漢山州の行政的な建造物（宮殿のような機能）と考える見解もみられる（張慶浩二〇〇九）。建築史には門外漢であるが私の見解を述べれば、「一六間・五三・五m×六間・一七・五m」の規模は、南山新城の長倉、特に長さ四七・三mの東側倉庫跡とほぼ同じであり、また壁体を持つ構造も同じく南山新城の中倉にもみられることから、王都山城の長倉のプランを真似て建造したのではないかと考えている。

繰り返し述べるように新羅では六八七年頃に地方制度（九州五小京・郡県制）の確立をみるが、六七二年前後は既存の州郡制の再編成が推進されている最中であつた。『三国史記』文武王一三年（六七三）冬条によれば「始置外司正州二人郡一人」とあり、檢察を任務とする外官である外司正が全国の州に二人、郡に一人派遣されているのがわかる。既存の研究で指摘されているように、この年には旧百濟人に新羅の官位を与えてもおり、全国に派遣された外司正は、広域の州・郡、さらには管下の多数の属県で檢察活動を行っていたと推察される（武田二〇〇〇、李成市二〇〇四）。羅唐戦争を目前にひかえ、漢江流域の漢山州は地理的にも平壤に駐屯した唐軍に対処する兵站基地の役割を担っていたと思われるが、そうした地域であれば新羅は一層統治体制の強化をはかったと考えられる。

まさにこの時築城された昼長城はその代表であり、城内の最良地に視覚的にも威力満点の構造である大型倉庫が建設されたのは、南山新城・富山城など都城山城並びに日本の北関東・九州山城の長倉（法倉）の役割にも通じるのである。さらに言えば、羅唐戦争前夜の兵站基地の漢山州に建設された最大規模の長倉（法倉）は、集権体制の確立に向けた文武王を頂点とする新羅朝廷の象徴物としての期待のあらわれと推察される。

したがって、既存の見解にやや異を唱えれば、単純な倉庫とみなすことができないのはもちろんであるが、軍事防衛の軍倉以上に地域社会における統治体制強化に一層の効力を発したと考えられるのである。この点は、超大型瓦より新しいⅠ層・Ⅱ層出土の「甲辰城年末村主敏亮」などの文字瓦の年代が七六四年又は八二四年（八二四年が一層有力視）であり、この建物が何度も改築を経て九世紀代まで健在であったことから推察される。さらには、文字瓦を通して、在地の村主・末村主が城の増改築工事に動員されているのがわかる。文字瓦が使用された時期の昼長城では、村主たちが恒常的に山城経営に関与していたことが想起される。既存の研究でも統一期以前は、七世紀初頭の二聖山城木簡により城内に中央派遣官の道使と在地首長の村主が常駐したことが確かめられ、山城をとりまく地方統治への村主の関与が指摘されている。しかしながら統一期の村主と山城の関係は、これを論じた論考も見当たらないため、統一以前から変化なく続いてきた姿なのか、国内の乱れる九世紀に入り村主の力が大幅に拡大することによる新たな動向（金周成一九八三）であるのか、今後の研究がまたれる。ところで、Ⅲ期の鞠智城では、「秦人忍□〔米〕五斗」木簡が出土しており、郡レベルが城内に米

を運んでいたことが確認できる。Ⅲ期鞠智城と郡司の関係がクローズアップされるが、これは新羅における昼長城と村主の関係にも通じるものであり、今後は両者の比較検討も可能と思われる。

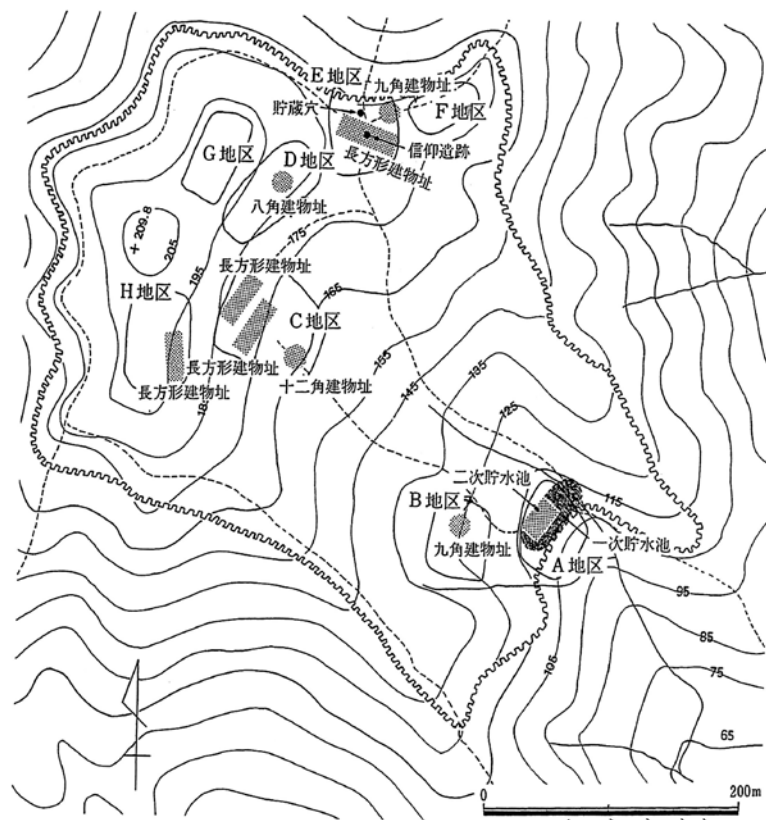
いずれにしても、新羅の統一事業の一環で漢山州に昼長城（南漢山城）が築城され、中心部に王都の王宮・寺院級の超大型の瓦葺礎石総柱建物が建てられたことを知りえた意義は大きい。ただし、南漢山城で見つかった新羅時代の出土遺構はこれが唯一であるため、城内の様子はほとんど窺うことができない。加えて、世界遺産に選定されている南漢山城では下層部の発掘調査は困難なようであるので、今後は同時期の他の山城で比較検討が可能な同様な建物跡が発見されるのを待つしかないであろう。

次に、八角形建物を中心に鞠智城との関連性が指摘されてきた京畿道河南市の二聖山城にも、比較的長大で長方形の礎石式総柱建物跡が存在する。二聖山城については昨年度の論文集で取り上げたので近藤二〇一六を参照願いたい。内部構造で特質すべき点は次のようである。六世紀中葉の築城後、七世紀後半・八世紀初（統一直後）

第2表 二聖山城の内部構造

用尺	建物	貯水池	城壁	
高句麗（高麗）尺	E地区建物、C地区1・2号長方形建物、単弁瓦、貯蔵穴、唐尺	A地区一次貯水池（戊辰年木簡出土）	一次城壁	前期（六世紀中葉）
唐尺	八角・九角・十二角建物が増築、長弁瓦、貯蔵穴埋め立て	A地区二次貯水池 C地区貯水池（？）	二・三次城壁	後期（八世紀初～九世紀末）

に大々的な改築が確認でき、少なくとも前期・後期に区分できると  
いう（沈光注二〇〇六）。



第14図 二聖山城城内図・建物配置図

ここで取り上げたいのは、城内の前期遺構のなかに存在する次の四棟である。C地区の1・2号及びE地区のものは大型である。

C地区1号 正面一七間×側面四間（三六二〇cm×八〇〇cm）

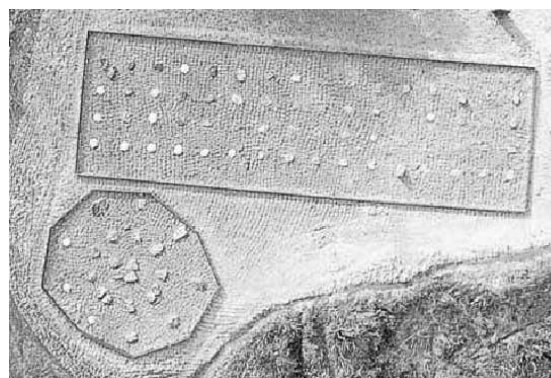
C地区2号 正面一六間×側面四間（三四〇〇cm×八〇〇cm）

E地区 正面一五間×側面四間（三二〇二cm×七八八cm）

H地区 正面七間×側面三間（二三七〇cm×六六〇cm）



第15図 C地区1号（上）・2号（下）



第16図 E地区 長方形・九角形建物

一際目を引くのは、城内最良の場所のC地区に、前後規格性をもって建てられた一号・二号である。両建物跡からは、硯や多様な土器類はもとより瓦片（完形の瓦も存在）が多数出土し、瓦の出土量の多さから両建物は瓦葺の礎石式建物であることが確実視されている。調査機関の報告書等では、礎石式総柱の構造をもつこれら大型の瓦葺建物跡は、すべて倉庫群と推定されている（漢陽大学校博物館一九八八・一九九一）。ただし、通常の倉庫群と断定するには疑問がないわけではなく、報告書の記載通り建物群の築造時期が六世紀中葉～七世紀初旬であれば、日本の国衙・郡家の正倉に瓦葺が採用されるのも八世紀以後であるが、通説よりかなり遡ることになる。ゆえに私も昨年度の論文集では、その時期の瓦葺の建物を通常の倉庫とみなすことに異を唱え、むしろ政庁的な側面が強いのではと推

測してみた。

しかしながら今回、日本古代の倉庫群・長倉（法倉）に加え新羅都城周辺の山城内の長倉や昼長城の大型建物跡を検討しながら、昨年度の見解についていささか訂正したく考えるようになった。二聖山城の長方形の礎石建物跡は、最大規模の長倉である南山新城や南漠山城の例に比べれば小規模であるが、日本の基肆城の長倉とほぼ同じ規模といえるのである。築造年代からみるといくらか疑問がないわけではないが、新羅山城における初期段階の長倉と考えることも可能なのではないか。さらに言えば写真からも、E地区の七世紀末～八世紀初の築造とされる九角形建物跡は、手前の長方形建物跡との景観を考えセットで建造されているようにも思われる。とすれば長方形建物跡（類似の構造のC地区の建物跡も含め）の年代も、築城段階よりはいくらか新しい時期、七世紀以降に設定できるだろう。

何より昨年度の論文集では、Ⅰ期後半～Ⅱ期鞠智城の増改築のなかで、統一を達成した新羅の国家祭祀を掌る王都羅井や二聖山城などの山城に建設された八角形建物と類似した建造物が出現したことに着目し、統一期の新羅と日本、肥後地域をとりまく外交・交流史を参照しながら、最先端の新羅の諸技術・文化が導入されていたことを指摘した。さらに今回、八世紀以降の大野城・基肆城・鞠智城に大宰府の主導で長倉（法倉）を中心とする礎石式倉庫群が形成された意義を、羅唐戦争前後の集権体制確立をめざした文武王代の新羅山城に建設された長倉・礎石式倉庫群の役割・機能と比較検討することで、一層具体的にできたと考える。九州の三城への倉庫群建設は、次に論じる八世紀の東アジア交通の展開を見据えた大宰府の強化を目的にしたもので、新羅などの最先端の諸技術が投入されて

一層発展した古代山城の姿をあらわしているといえる。大宰府によるこうした動きは、古代山城に限定されるものでなく、大宰府都城の整備など諸事象にも及んでいたと推察されるので、一層多方面からの検討が必要となろう。

### 三、八世紀の肥後地域と律令国家日本、東アジア―耽羅（済州島）

との関係を中心に―

#### （一）遣唐使航路の開拓・南島政策と耽羅（済州島）、肥後地域

Ⅱ期鞠智城で六九八年～八世紀前半に繕治（増改築）が行われ隆盛期を向かえる背景に、律令国家の成立にともない実施された南島政策並びに南九州の隼人支配があったことは、既存の研究でも度々指摘されている（岡田二〇一〇・二〇一五、佐藤二〇一四、菊池二〇一四など）。具体的には、次のような六九八年からの覓国使の派遣並びにそれに伴う南島人の来朝や、遣務広式文忌寸博士等八人于南嶋覓国。因給戎器。（『続日本紀』文武二年（六九八）四月壬寅条）

文忌寸博士、刑部真木等自南嶋至。進位各有差。（『続日本紀』文武三年（六九九）十一月甲寅条）

薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君県、助督衣君弓自美、又肝衝難波、從肥人等持兵、剽劫覓国使刑部真木等。於是、勅竺志惣領、准犯決罰。（『続日本紀』文武四年（七〇〇）六月庚辰条）

繕治翌年の六九九年一二月の三野城（日向国児湯郡三納）・稻積城（大隅国桑原郡稻積）の築城をかわきりに、大宝二年（七〇二）の薩摩・多櫛の反乱・征討により国制整備が実施され、和銅二

年（七〇九）までに薩摩国、和銅六年（七一三）年に大隅国の設置をむかえることなどとの関連である（中村一九八八、鈴木靖二〇一四、田中聡二〇一五など）。また、最近吉村武彦氏は、覓国使派遣の出港地として、薩摩への肥後地域民の移住政策などを念頭に置きつつ飽田国府の外港など肥後国の港を想定している（吉村二〇一四）。この指摘は八世紀における肥後地域の役割を考える上で極めて重要であろう。

ところで、覓国使派遣にみる一連の南島政策の中には、遣唐使の新航路開拓の目的も含まれていたという指摘は古くからある（森克一九七五、鈴木靖一九八五・二〇一四、山里二〇一二）。大宝二年（七〇二）から再開される遣唐使の派遣は、律令国家成立後の日本を対外的にアピールするうえで最大の事業であった。六三〇年から八四〇年までの遣唐使の航路については、朝鮮半島西海岸沿いを北上する北路（新羅道）、平戸や五島列島から東シナ海を横断する南路、九州を南下しさらに南島を伝い横断する南島路の三つの航路が古くから想定されている（森克一九五五）。なかでも再開後（大宝二年以降）は、諸事情により北路は選択しなくなり、代わりに後者のどちらかをとるようになったというのが概ね一致する見解である。上の南島政策と遣唐使を結び付ける説では、大宝二年の遣唐使派遣を成功に導くべく新たに創設されたのが南島路であったと考えている。ただ、南島路については、臨時的なもので正式ルートとは認めがたいという説も多いようである（近年では大日方一九九〇など）。ともあれいかなる形であれ、南島路のルートが実在したことは、次の南島牌に関わる記録により明らかである。

勅大宰府曰。去天平七年、故大貳従四位下小野朝臣老遣高橋連牛

養於南嶋、樹牌。而其牌経年今既朽壞。宜依旧修樹。每牌頭著嶋名并泊船処、有水処、及去就国行程遙見嶋名、令漂着之船知所帰向。（『続日本紀』天平勝宝六年（七五四）二月丙戌条）

上の史料によれば、天平七年（七三五）に大宰府官人を南島に派遣して島々の名称・停泊地・水のありか・航程等を事細かく記した牌を建て、さらに二〇年後の天平勝宝六年（七五四）には修復していることがわかる。政府は大宰府を通して南島と遣唐使の関わりを把握していたと考えられる。また、詳細は述べないが、『唐大和上東征伝』に記された南島航海の様子や「正倉院文書」の天平八年薩摩国正税帳に記された寄港した遣唐使への支給経費の事例などからみるに、律令政府は南島路ルート上で何らかのトラブル発生時には十分なバックアップができる体制を築いていたことが窺い知られる。このようにみれば、南島をとりまく東シナ海的重要性は一層増したであろうし、前述のように肥後国府・鞠智城が南島・隼人支配に関与していたとすれば、肥後地域の役割もより高まったと思われる。とはいえ、仮に南島路の存在を否定する立場であっても、北路（新羅道）をとらず南路を選択したわけであるから、律令政府の東シナ海に対する認識は同様であったと考えられる。実際に宝龜九年（七七八）十一月の例など、南路を利用した際の薩摩国や肥後国への漂着は一層増えているのである。

そこで、律令国家成立期の遣唐使派遣における北路から南島路・南路への転換と関連してクローズアップされるのが、八世紀の新たな新羅との関係であり、遣唐使が頻繁に漂着したことで知られる耽羅（済州島）の存在である。次の史料によれば、遣唐使が耽羅に漂

着した場合には抑留されることが多く、政府は大宰府の官人を新羅に派遣して解決に努めたことが窺い知られる。

遣唐第四船来泊薩摩国甕嶋郡。其判官海上真人三狩等漂着耽羅嶋、被嶋人略留。但録事韓國連源等、陰謀解纜而去、率遺衆四十余人而来歸。（『続日本紀』宝亀九年（七七八）十一月壬子条）

以大宰少監正六位上下道朝臣長人為遣新羅使。為迎遣唐判官海上三狩等也。（宝亀十年（七七九）二月甲申条）

大宰府言、遣新羅使下道朝臣長人等、率遣唐判官海上真人三狩等来歸。（宝亀十一年（七八〇）正月辛未条）

上の史料並びに八世紀の遣唐使関係史料・日羅関係史料をもとに、遣唐使派遣における南島路・南路の使用、それに伴う対新羅外交（遣新羅使）の目的、耽羅の問題という三者を、一括りにして明瞭に説いたのは森克己氏である。先駆的な森氏の見解の要旨をあげれば次のようである。

「東シナ海・黄海には、時計の針と逆にまわる逆転巡環回流が存在する。・・・中国より南島路や南路（大洋路）を通過して日本に向う船が風浪によつてこの回流に乗ってしまうと済州島に漂着する場合が多い。済州島民は頑冥で、漂着した人々が屢々迫害された。

遣唐使たちが最も恐れたのは済州島に着くことと、人を喰う国といわれた流求に漂着することであつた。したがつて南島路をとるようになったのもこの回流に乗つて新羅に漂着する場合があり、新羅にその保護を依頼しなければならなかつた。一例をあげれば七十七年（宝亀八）入唐した持節副使小野石根以下の第十四次遣唐使は、翌七十八年（宝亀九）九月南島路をとつて帰朝の途にいたのである

が、その第一船は難破し、第四船は薩摩の甕嶋郡に着いたが、乗っていた判官海上真人三狩らが新羅の耽羅島（済州島）に漂着した。

そこで政府は下道朝臣長人等を遣新羅使として三狩らを引取りに新羅へ遣わし、長人らは翌七十九年（宝亀一〇）七月、三狩を引き取つて帰朝している。以上のようなありさまであるから、南島路をとるようになって、遣唐使出発前に、新羅へ万一の場合の保護依頼の使を派遣しているのである。（森克一九七五）」

ただし、あたかも遣新羅使の最重要任務が、遣唐使が新羅沿岸を通り入唐した七世紀のみならず、八世紀以降も新羅領の耽羅などに漂着した場合に対する保護の依頼であつたというような解釈には、多くの批判が集まっている。例えば鈴木靖民氏は、遣新羅使の派遣は日本と新羅との外交関係のなかで実施されたもので、遣唐使に付属する性格ではないとされている。いずれにしても確かな点は、八世紀の律令政府は遣唐使派遣の際に耽羅（済州島）に漂着する脅威を抱いており、新羅とのパイプによりその保護体制を確立していたことである。なお最近浜田久美子氏は、森氏の見解を再評価して、八世紀初頭から遣唐使派遣時には新羅へ「仮道」の礼を示していたとされている（浜田二〇一四）。

したがつて、大宝二年の遣唐使派遣をかわきりに新たに開拓した南島路・南路の使用にともない、当時の日本政府、その実務を担当する大宰府は、耽羅に対して一層情報収集に努める必要があつたと考えられる。ところで、文武王一九年（六七九）の新羅併合を経た六九三年以降は耽羅が日本に正式な使節を派遣することはなかったが、新羅統一前後は頻繁に遣わしていた（詳細は森公一九九八、秦



栄一二〇〇八参照)。そうしたなかで、鞠智城のある有明海に面した肥後地域は、栄山江流域の前方後円墳、磐井・日羅などに代表される六・七世紀以来、白村江の戦い以後においても、耽羅を含む朝鮮半島西南地域と活発な交流・外交を持続していたのであった(近藤二〇一五)。とすれば、律令国家日本の最重要課題のひとつ遣唐使派遣にともない、南島路・南路のバックアップ体制並びに耽羅問題が浮上すると、有明海地域・肥後国への関心は一層高まったと考えられる。

## (二) 耽羅(済州島)と有明海地域・肥後の交流史

上記は遣唐使船の耽羅漂着を想定したものであるが、反対に八世紀前半にも耽羅人が日本列島に来航(漂着)してきた例も指摘されている(森公一九九八)。森公章氏は、次の「天平十年(七三八)周防国正税帳」(『大日本古文書』所収)に「耽羅嶋人」と「耽羅方脯」が記されていることを手掛かりに、当時の耽羅と日本の交流について検討している。

①廿一日向京へ耽羅嶋人廿一人、四日食稻卅三束六把、酒六斗七升二合、塩一升六合八勺、部領使へ長門国豊浦郡擬大領正八位下額田部直広麻呂、将従一人、合二人、往来八日、食稻五束六把、酒八升、塩三合二勺。(天平十年周防国正税帳『大日本古文書』二一一三三)

②耽羅方脯肆具価稻陸拾束(具別十五束)。(同上二一一三八)

森氏は、まず①から「長門国豊浦郡擬大領額田部直広麻呂が羅島人を向京部領して十月二十一日に周防国を通ったこと」を確認す

る。なお彼らの身分としては、外交使節ではなく漂着した漂流民の可能性が高いと推論する。次に②に「耽羅方脯」四具とその価格がみられることを確認し、さらに賦役令貢献物条義解にも「耽羅脯」がみえることを根拠に、周防国が①の耽羅人から耽羅方脯を購入して中央に貢上したことを指摘する。また森氏は、「方脯」は『和名抄』の脯を参照すれば鹿・牛・猪のどれかの乾肉であろうと推定する。

以上のことから、航路は定かでないものの耽羅人が長門国に来日(漂着)し、交易活動までを行っていたことを窺い知ることができる。そして興味深いのは、彼らは入京している点である。ここには政府の何らかの特別な意図を読み取れるのであり、前述した遣唐使をとりまく耽羅の状況を考慮すれば、耽羅に関わる情報を直接入手するためではなかったかと思われる。

さらに森氏の論考で興味深いのは、『延喜式』主計上式の調のなかに、肥後国に「耽羅鯨卅九斤」、豊後国に「耽羅鯨十八斤」がみられることを指摘し、肥後国と豊後国の両国も、前述の周防国と同様に耽羅から鯨を交易で入手し調として貢上した可能性がありうることに言及していることである。ただし森氏は、耽羅鯨については、平城京木簡三四四号に次のように記されていることから、

志摩国英虞郡名錐郷 戸主大伴部国万呂戸口同部得島御調

耽羅鯨六斤天平十七年九月

天平一十七年(七四五)に志摩国が耽羅鯨を貢上しているのがわかり、耽羅鯨とは種類を表わすものといえようと結論づけている。ともあれ耽羅鯨が産地でなく種類名であったとしても、当時の日本で耽羅鯨という名称が定着していたことは明らかであり、耽羅産の鯨



が有名であつたためにそれにちなんだ名付けられたと推察される。それならば政府としては、本物の耽羅産の鰻は一般的な耽羅鰻よりも一層高級品として欲していたと考えられるので、有明海・東シナ海を介して耽羅・韓国西海岸と歴史的に深い交流をもつ肥後国並びに豊後国に、それを調として課していた可能性は十分想定できる。つまり延喜式に記される肥後国の耽羅鰻の存在は、両地域間の交流の深さ、ひいては交易活動までを物語っている。

このように、八世紀に入ると遣唐使の航路問題なども重なり、有明海地域と耽羅の関係は一層深まったと考えられる。そうしたなかで、天平一二年（七四〇）に乱の失敗により逃亡、再起をはかろうとした藤原広嗣がとつた行動が注目される。藤原広嗣並びに乱の経過・影響、史料の整合性については諸研究があるが（最近では西別府二〇一六）、次の史料下線部から、乱に失敗した藤原広嗣は肥前値嘉島から耽羅に渡海・亡命を企てていることが窺い知られる（長一九八六、木本一九九三）。

①是日、大將軍東人等言、進士无位阿倍朝臣黒麻呂、以今月廿三日丙子、捕獲逆賊広嗣於肥前国松浦郡値嘉嶋長野村。詔報曰、今覽十月廿九日奏、知捕得逆賊広嗣。其罪顕露、不在可疑。宜依法処決、然後奏聞。（『続日本紀』天平十二年（七四〇）十一月丙戌条）

②大將軍東人等言、以今月一日、於肥前国松浦郡、斬広嗣・綱手已訖。……又以今月三日、差軍曹海犬養五百依發遣、令迎逆人。広嗣之従三田兄人等廿余人申云、広嗣之船、従知駕嶋発、得東風往四箇日、行見嶋。船上人云、是耽羅嶋也。于時東風猶扇、船留海中、不肯進行。漂蕩已經一日一夜。而西風卒起、更吹還船。於是、広嗣自捧駅鈴一口云、我是大忠臣也。神靈弃我哉。乞頼神力、風波暫静、

以鈴投海。然猶風波弥甚。遂着等保知駕嶋色都嶋矣。広嗣、式部卿馬養之第一子也。（『続日本紀』天平十二年（七四〇）十一月戊子条）

具体的に大野東人の報告内容によれば、広嗣は一〇月六日の板櫃川の戦に敗れて逃走後、①のように一〇月二三日に肥前国松浦郡値嘉嶋長野村において捕らえられ、②の十一月一日にそこで斬られていた。さらに、官軍の軍曹海犬養五百依が広嗣の従人であつた三田兄人ら二〇余人を取り調べた結果、広嗣は下線部のように、知駕島から船で発し、四日して耽羅島の近くまで到つたものの、一日一夜漂蕩し、逆風にあつて等保知駕嶋の色都島に吹き返されたことが判明している。このように、広嗣はあと一步のところまで耽羅にたどり着くことはできなかったわけであるが、五島列島、有明海地域には広嗣を支援し耽羅にまで送り届ける勢力が存在したことがわかるのである。

有明海地域と耽羅の間をとりもつ勢力としては、まさに広嗣が出港した肥前値嘉島の人々を述べている『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷に、「此の島の白水郎、容貌は隼人に似て、恒に騎射を好む。其の言語は、俗人に異なり」と記される。これについては、以前から長洋一氏が、「土蜘蛛」を主題に隼人並びに朝鮮半島との関係を踏まえ次のように説明している。

「肥前国では、値嘉郷の大家嶋・小近嶋・大近嶋などの島や、彼杵郡の速来村・健村里・川岸村・浮穴郷・周賀里のように大村湾に面した所に土蜘蛛の所在地があつた。……値嘉郷の島々をみる時、小近嶋が注目される。この小近嶋は五島列島の北端にある現在の小値嘉島であるが、ここの海人は土蜘蛛といわれ、天皇はこれを殺

そうとしたが、御膳を出すということで死を免がれた。そのような海人は、また容貌が「隼人に似て恒に騎射を好み、其の言語は俗人に異なる」とされ、隼人との関係が指摘されている。近時、この島の神ノ前遺跡の発掘が行われ、その地下式板石積石室墳の分布から薩摩地方との交流のことが判り、一方、鍛造鉄斧や陶質土器の出土により、朝鮮半島との交流もあったことが判明した。むろん九州北部海岸地方との交流は多かった。このような小値嘉島にいた海人は、九州の西海岸地方の航路の要地において交流の展開に重要な役割をになつていて、いわばこの海の道の道主的なものではなかっただろうか。（長一九八六）」

つまり、史料の白水郎・土蜘蛛とされる海人が、有明海地域と耽羅の間をとりもつ勢力であったことがわかる。また長氏は、政府に従わない輩の多い肥前など有明海地域を鑑みて、新羅征討計画が沸き上がった天平宝字五年（七六一）にも肥前国からの動員が水手（数は二四〇〇人と多数）のみで兵士がみられないのは、新羅への水先案内としての面もあるが上記のような理由のためと説明する（長一九八六・一九九五）。なお長氏の論考において、新羅人が多数居住する地域の常陸国と豊後国の『風土記』にも、土蜘蛛伝承（常陸に七つ・豊後に三つ）が存在したことが示されている点も興味深い。

さらに近年では、上の白水郎を、覓国使の史料下線部にみられるように隼人と結びついて政府の南島政策を阻害した「肥人」や、『賦役令』集解辺遠国条記の律令政府に帰属しない「肥人」<sup>(二)</sup>と結びつける解釈もなされている（田中正二〇〇九、田中聡二〇一五）。これらを裏づけるかのように、三養基郡上峰町の八世紀後半代の船

石遺跡では、「肥人」のみならず「多櫛」を記した刻書土器が出土している（基山町史編さん委員会二〇〇九には写真を掲載）。この地域は、七世紀末から八世紀前半代には、大宰府が有明海側から隼人征討のために軍団兵士を集結させていたことが推定されている（田中正二〇〇九）。ともあれ、政府に反発するにせよ呼応するにせよ、八世紀に入り律令国家が南島支配や遣唐使派遣事業において新たな政策を打ち出すと、肥人など有明海地域の海上勢力の果たす役割は一層増大したと推察される。特に北路から南島路・南路ルートへの変更にともない、正式の外交がストップしていた耽羅との関係が重要になるにつれ、歴史的にも交流を持つ有明海、肥後地域は以前にもまして政府の関心を集めたのであった。

### （三）大湊、鞠智城の増築と東アジア交通

上記のことを念頭に置けば、そうした地域には、遣唐使の航海など律令国家の対外政策をバックアップする施設、ひいては兵站基地を築いたに違いない。とはいえ、現在まで航路上の最前線の五島列島などには、拠点となるような古代遺跡は全く発見されていない。外来系遺物も、新羅土器の破片など僅かばかりであつて交易が介在する陶磁器などとは見つかつておらず、新羅仏像は存在するが後世の倭寇によりもたらされた公算が大きいとされる（高正龍二〇〇七）。今後の発掘成果による部分は大いだが、八世紀を中心とする古代においては、最前線にそうした施設が造られることはなかったのではないか。むしろ確固たる地域支配の拠点のある場所に、バックアップ、ひいては兵站の役割を担わせたと推察されるのである。

そこで真つ先に想起されるのは、熊本県内で唯一「大湊」の地名が残っている現在のJR玉名駅の裏手の小字「大湊」である。当時の大湊（水駅）は、JR玉名駅が湾の中央にあたり、南北一二〇m・東西一七〇mの入り江で入口は六〇mと推定されている。この大湊が存在する玉名郡については、早くから発掘調査がなされ現在までに、立願寺廃寺、郡倉（正倉）跡、郡庁などの建物跡が確認され、その全貌が明らかになっている。また立願寺からおびただし量の瓦が出土していて、その中には九州では類例のない鬼面瓦や新羅系の複蓮弁軒丸瓦が含まれているという（玉名市立歴史博物館二〇〇五）。さらに田中正日子氏は、大湊の機能を一層評価して、

この場所に蕃客・帰化の職務を担う施設が置かれていたと推測している（田中正一九九八）。田中氏が注目したのは、立願寺廃寺を中心に郡庁と正倉が前後に配置された点である（ゆえに郡庁と正倉の間は距離がある。玉名市立歴史博物館二〇〇五の一二七頁第五図玉名郡衙関係遺跡配置図を参照）。大宰府系瓦が持ち込まれる立願寺廃寺再建のⅡ期（八世紀初～中葉）にも寺の場所を移動させず正倉と一体で機能させたのは、対外的に蕃客を受け入れるのに合わせたからとされる。

この見解は、私も強調する六・七世紀以来の有明海地域のもつ多元的外交の再整備を具体的に指摘した点で興味深いが、大宰府の外ルートを那の津（博多湾）の筑紫館（後の鴻臚館）に一元化した律令国家成立期の八世紀前半に、有明海側へも恒常的な蕃客の来日を想定し客館を設置したとは考えづらい。玉名郡の大湊建設は、新羅など諸外国からの使節に対応するためではなく、有明海地域の海上勢力に対する抑えと同時に、往来航路を中心とする遣唐使関連、

南島・南九州政策、耽羅問題など日本側の東アジア交通をバックアップすることにあつたのではないか。ともあれこの大湊は、近隣の鞠智城の増改築に直接影響を及ぼしたと考えられる。鞠智城は、玉名郡など有明海沿岸地域に加えほぼ肥後全域と車路や菊池川水系などで結ばれていたもので、築造期以来大宰府の出先機関として軍事防衛・外交、広域的な地域支配にいたる多方面な活動に従事してきたことが指摘されている。したがって、八世紀の東アジア交通並びに国際環境が有明海・肥後地域に多くの影響を及ぼすにつれ、それらに対処すべくⅡ期～Ⅲ期の鞠智城はいくらか変化（増改築）を遂げたわけである。

前述のように八世紀の律令政府は、東シナ海にて何らかのトラブル発生時には十分なバックアップができる体制を築こうとしたが、この時建設された鞠智城を含む三城の長倉・礎石式倉庫群に収められた備蓄の稲穀・物品は、想定外の緊急時や特別な対外的なマネジメントへの使用を当初から意図していたと推察される。小規模な寄港や漂流などの際には、例えば次の「正倉院文書」の天平八年（七三六）薩摩国正税帳に、

遣唐使第二船供給額稲漆拾伍束陸把

酒伍斛参斗

唐からの帰路の際に薩摩国に寄港した遣唐使第二船（副使中臣朝臣名代）の乗組員に対して、薩摩国の財源から額稲七五・六束と酒五三斗を支出したと記された通りの対応で十分であつたろう。しかしながら、東シナ海レベルでは、一国では解決困難なトラブル、果ては有事までを想定しておかなければならず、ゆえに優れた機能

をもつ既存の三城が一層活用されたのではないか。ところで、山城に蓄積された大量の稲穀は、対外交易に利用された可能性も想定しておくべきである。平安時代の一一世紀の事例であるが、米による貿易決済の事例が数多くみられ（『権記』長保二年（一〇〇〇）七月一三日条・『水左記』承暦五年（一〇八一）一〇月二五日条など）、九州の米（「鎮西米」）は当時ブランドで多数輸出されているためである（山内二〇〇三）。なお、玉名郡の大湊は、八世紀末の菊池川氾濫による堆積で機能を停止したと推定されているが、『日本三代実録』貞観一七年（八七五）六月条には「大鳥二集肥後国玉名郡倉上」とみられる。同時期の鞠智城でも類似する倉庫の異変が報告されており、鞠智城の終末期まで両者の関わりが推定できるようである。

このように、八世紀の鞠智城の役割・機能は、一言でいえば有明海・肥後地域に対する抑えと兵站ということになるが（柿沼二〇一四、五十嵐二〇一六など）、そこには耽羅までを含む東アジア交通が密接に絡んでいたことを強調しておきたい。

#### むすびにかえて―大伴安麻呂・旅人、道君首名と新羅―

以上では、文武二年（六九八）頃から八世紀に大宰府の主導で大野城・基肄城・鞠智城に増築、形成された礎石式総柱の長倉・倉庫群は、近い頃の集権体制確立期（羅唐戦争前後の文武王・神文王代）の新羅の山城に新築されたそれらと極めて類似することを論じた。とすれば、三城への倉庫群建設を推進した大宰府官人・該当国司は、新羅山城のそれらのプランを把握していた可能性が想起される。これについて既に先の論文では、鞠智城の八角形建物を中心とする三

城への増改築の始まりを、持統三年（六八九）九月の新城監察と絡めて論じつつ、この時に筑紫に遣わされた石上朝臣麻呂は、次のように新羅・新羅人と太いパイプをもっていたと指摘した。

「石上麻呂は、天武朝の諸改革に多大な影響を与えたとみた六七五年の新羅請政の翌年、天武五年（六七六）一〇月に遣新羅使として派遣され二月まで新羅に滞在していた。またその後彼は、文武四年（七〇〇）一〇月には筑紫総領に就任しており（『続日本紀』文武四年一〇月己未条。七〇二年には大宰帥とある）、持統朝から文武朝にかけて一貫して新羅と関わり深い九州地域の職掌に携わっていた。（近藤二〇一六）」

このように、大宝律令制定時の大宰帥は遣新羅使の経験をもつ石上麻呂であったが、三城への長倉・礎石式倉庫群の建設時期に大宰帥であった人物の経歴をみると、その次の帥で下記の大伴安麻呂や遣唐大使を歴任した粟田真人をはじめ、東アジア交通に従事した経験をもつ場合が多いといえる。特に大伴氏は、六世紀の大伴金村以来歴史的に朝鮮半島と深い繋がりを有していたが（通史的にみた大伴氏の動向は荒木二〇一四参照）、新羅人との関わりが明らかなる大伴安麻呂と旅人の親子が大宰帥にあったことは注目される。三城の増改築時に指導的立場にいた兩人の大伴氏と、Ⅱ期鞠智城当時の代表的な肥後国司であった道君首名について、新羅との関わりを中心に少々触れることでむすびにかえたい。

まず、七〇五年から七〇八年まで大宰帥に就いていた大伴安麻呂は、次のように六八六年正月に筑紫に派遣されてきた新羅使節金智祥を接待した経験をもっていた。

為饗新羅金智祥、遣淨広肆川内王・直広參大伴宿禰安麻呂・・・直  
広肆穂積朝臣虫麻呂等于筑紫。（朱鳥元年（六八六）正月是月条）

この後の同史料の四月条によれば、新羅使は鞍皮を含む豪華な獻物を持参して来て、日本側も川原寺伎楽を送るなど長期にわたり筑紫で丁重に対応したとあり、安麻呂が新羅使節と緊密に交わっていた様子が垣間見られる。

さらに安麻呂（七十四年没）ら大伴家と新羅の関係は、その子旅人、家持と続く邸宅に新羅人が常駐していたことから窺い知られる（鈴木靖二〇一六）。次の史料は、当時大伴家の家政を掌っていた大伴坂上郎女が（家持は病氣療養のため有馬温泉に滞在）、天平七年（七三五）に新羅国尼の理願の死を悼んで作った歌の注部分である。

右、新羅国尼名曰理願也。遠感王德歸化聖朝。於時寄住大納言大將軍大伴卿家、既經數紀焉。惟以天平七年乙亥、忽沈運病既趣泉界。……仍作此歌贈入温泉。（『万葉集』卷三四六〇・四六一番）

これにより、新羅人僧尼の理願は数十年大伴家に居住していたことが直接確かめられるが、仏教・学芸に秀でた彼女は、大伴家の人々の教育にもあたったであろう。さらに言えば、長屋王の邸宅でも新羅人に米飯を支給したことを記す木簡が見つかっているが、大伴家など貴族の邸宅に常駐した新羅人は、その家の人々に専門的な技術・技能を多数伝授していたと推定される。特に大伴家に暮らす新羅人はその代表格であったと考えられる。

そして、こうした環境の中で成長した大伴旅人が、七二七年頃

（『万葉集』卷八・一四七二の妻の死亡年から類推）から七三〇年まで大宰帥に就いていた。繰り返しになるが上の『万葉集』によれば、旅人は勅使の石上堅魚と基肄城を訪れて歌を詠んでいる。これは旅人の基肄城への関心の深さを示しており、基肄城の増改築を含む運営にも直接関与していたことを窺わせる。基肄城などの長倉建設にも、彼のような人物の働きかけが大きかったのではないか。

また旅人は、大宰府の地で九州の主要国の官人を度々集めて宴会を開いていたようであるが（参加者の国司・官人は荒木二〇一四参照）、都を離れた官人の意識的な関係を維持しつつそうした地域の情報収集に努めていたようである。さらに旅人は、赴任以前より九州地域と深い関係にあったと思われる。養老四年（七二〇）二月の隼人（中心は大隅国）の反乱に際して、旅人は征隼人持節大將軍に任命され、副將軍の笠御室・巨勢真人らと反乱の鎮圧にあたっているのである。乱の征討経過は、九州の東西から進軍し一定の成果を上げたものの律令国家の支配体制に反発する隼人の抵抗は容易に収まる気配はなく、大將軍の旅人自身は八月に副將軍を南九州に残して京に戻っている。この隼人の乱が終結するのは翌年の七月であったとされる。ともあれここで留意したいのは、旅人の征討経路である。中村明蔵氏は、隼人征討に向かった途中の八代海の南端にあたる「黒之瀬戸」を懐古して詠んだ歌（『万葉集』卷六・九六〇）を手がかりに、旅人は九州の西岸ぞいを南下し薩摩に入り薩摩国庁で指揮をとったと推定されている（中村一九八八）。つまり旅人は肥後地域に立ち寄ったものと想定できるので、この時鞠智城にも来城した可能性は十分ありえよう（岡田二〇一五討論）。とすれば、旅人は基肄城と同様に鞠智城に対しても相当把握しており、積極的に運

営にも関与したと考えられる。

最後に、下の卒伝にみられるように筑後守・肥後守の在任中に亡くなった道君首名である。筑後守に就任する以前の彼は、『続日本紀』によれば、文武四年（七〇〇）の大宝律令制作に携わり、大宝元年（七〇一）六月には大安寺で僧尼令の講説を担当しているが、和銅五年（七一二）九月から約一年間は、次のように遣新羅大使として新羅に滞在していた。

以従五位下道君首名、為遣新羅大使。（和銅五年（七一二）九月乙酉条）

従五位下道公首名、至自新羅。（和銅六年（七一三）八月辛丑（一〇日）条）

従五位下道君首名、為筑後守。（和銅六年八月丁巳（二六日）条）

そして彼は、帰国後すぐに筑後守に任命されている。これは、彼が平城京遷都後最初の遣新羅大使であることから、新羅での滞在経験を九州で直接活用したい意図を多分に含んでいたと推察される。その後彼は卒伝の通り亡くなる養老二年（七一八）まで筑後守であったが、『懷風藻』に収められる道公首名の一首に「正五位下筑後肥後守道公首名年五十六」とみられ、『続日本後紀』承和二年（八三五）正月癸丑条には「和銅年中、肥後守正五位下道君首名、治迹有声」とあることから、肥後守を兼任していたことが確かめられる（板楠一九九九、玉名市立歴史博物館二〇〇五）。

彼が農業振興・灌漑治水事業であげた功績・名声は次の卒伝の通りであるが、

乙亥、筑後守正五位下道君首名卒。首名、少治律令、曉習吏職。和

銅末、出為筑後守、兼治肥後国。勸人生業、為制条、教耕営。頃畝樹菓菜、下及鷄豚、皆有章程、曲尽事宜。既而時案行、如有不遵教者、随加勘当。始者老少窃怨罵之。及収其実、莫不悦服。一兩年間、国中化之。又興築陂池、以広溉灌。肥後味生池、及筑後往々陂池皆是也。由是、人蒙其利、于今温給、皆首名之力焉。故言吏事者、咸以為称首。及卒百姓祠之。（養老二年（七一八）四月乙亥条）

特に名称を記す肥後国の味生池の造営は彼が最も力を入れたことを想起させる。ところで、前述の新羅での滞在歴を踏まえれば、彼が肥後や筑後で行った灌漑農業事業には、新羅で得たノウハウが利用されていたのではないか。既存の研究でも新羅では、王都慶州近郊の永川市に菁堤という貯水池遺跡とともに立地する永川菁堤碑（両面に記録があり、丙辰年（五三六）と貞元一四年（七九八）に比定）や、大邱市大安洞で発見された戊戌塙作碑（五七八年又は六三八年に比定）などから、大規模な灌漑治水事業が展開され農業生産力が増大したことが具体的に指摘されている（盧鏞弼二〇〇九）。彼は当然、王都近郊に位置する上のような灌漑施設の情報には得ていたはずであるから、帰国後の赴任先でもすぐさま最新の諸技術を実践しようとしたと思われるのである。

道君首名のように『続日本紀』の卒伝に国司を記録するのは異例中の異例であったとされるように（板楠一九九九）、新羅に精通した彼の能力の高さと、それをいち早く投入して地域開発を試みた有明海地域・肥後国の位置づけが窺い知られる。なお卒伝には、死後は地域の人々が彼を祀ったと記しているが、現在も玉名地域を中心

に彼を祀る神社（玉名市高瀬の保田木神社と繁根本の砂天神、天水町小天の天子宮など）が多数存在することが指摘されている（玉名市立歴史博物館二〇〇五）。前述のように、彼の肥後守時代の八世紀前半の玉名には大湊が存在し、鞠智城でも増改築がなされ隆盛期を迎えているが、彼が新羅で獲得した諸技能は如何なく発揮されていたと考えられる。

## 注

（一）昨年度の論文集では引用できなかったが、上田龍児二〇一五「大野城築城と新羅」『新羅王子がみた大宰府・九州国立博物館開館一〇周年記念イベント講演集』九州国立博物館も参照される。上田氏は、四王寺山近隣の遺跡から新羅系文物が出土したことを通して、大野城築城に古くから定住した新羅人渡来人の関与を推定している。ところで、大宰府都城においては、百済の泗沘都城との類似性が強固に指摘されてきたが（最近発掘された筑紫野市前畑遺跡の土塁跡を含めて）、後述のように慶州の新羅都城の影響も考慮すべきであると考えている。

（二）赤司氏の分類によれば、築城期のⅠ期Aには、官衙風の掘立柱式側柱建物（SB六四）は存在するものの総柱建物は確認されていないとする。最初の倉庫跡建設は、Ⅰ期Bの三×九間の大型掘立柱式総柱建物（SB六五）からとみられる。

（三）他の日本の古代山城には存在しない「L」字形建物群と八角形建物については、筆者も私見を述べたので参照していただきたい（近藤二〇一六）。なお、赤司二〇一五、大橋二〇一五では八角形建物群を穀物倉庫と推定している。

（四）最近の報告でもⅢ期（八世紀第1四半期後半～八世紀第3四半期）は、次のように説明されている（西住二〇一五）。

「Ⅲ期は鞠智城の転換期である。城内の建物配置はⅡ期を踏襲しながらも、掘立柱建物が小型礎石を使用した礎石建物に建て替えられる。土器出土の空白期に当たることから、城の存続上必要な最小限度の維持・管理がなされていたと考えられる。」

（五）三×四間の古い事例が六世紀後半の那津官家関連の福岡県比恵遺跡や有田遺跡などの倉庫群に見られることから、ヤマト王権の拠点施設に導入された平面形式を地方官衙の倉にも採用したという見解もみられる（山中敏一九九一）。

（六）Ⅳ期は鞠智城の変革期とされる。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、Ⅲ期の礎石建物が大型礎石を使用した礎石建物に建て替えられ、食糧等の備蓄機能が主体となるという（西住二〇一五）。

（七）酒寄二〇〇九の論文を要約すれば次のようである。

「中でも注目されるのは、二点の甕である。何れも陶質土器の底に多くの孔が開けられている形式で、亀田修一氏は、類似する須恵器の多孔甕が七世紀末ごろに突然出現し、それも武蔵と美濃に限られていると指摘し、朝鮮半島から直接美濃や武蔵へ搬入されたものと考えている。こうした指摘を考慮するならば、西下谷田遺跡へやって来た渡来人は、来着すると、直ちに政府によって移配地ごとに振り分けられ、そのまま甕を携えて下毛野の国宰所、また河内評家であった西下谷田遺跡という政治的拠点に直行させられたとみられる。」

（八）漢山州（漢州）は、真興王代に半島西海岸への進出をめざしていた新羅が、高句麗と百済の戦闘の最中に漢山城一帯（漢江流域）を奪取し、五五三年に置いた新州である。六世紀中葉以降の漢山州一帯には、漢城を中心に数

多くの山城が築かれた。なお、新羅の山城については、資史料に地方行政単位として「城」がみられ、考古学的にも山城の実態が明らかになったことから、地方統治の拠点として早くからリンクされ研究されてきた（詳細は近藤二〇一六参照）。

(九) 二聖山城の当時の名称とそれに関わる木簡の用途（移動）をめぐる見解の相違がみられる。当初は、文書形式の本木簡は受信地で廃棄されたとして、出土地の二聖山城は須城とみなされた。ところが、現在の南漢山城は文武王十二年（六七二）に築城された昼長城である可能性が高いことがわかり、木簡にみる南漢城が現在のそれとは違うことが明らかにされはじめると、二聖山城を南漢城とみなす見解が提示されるようになったのである（近年では二聖山城を南漢城と考える説が優勢）。二聖山城及びその木簡の概要は、近藤二〇一六を参照。

(一〇) 『万葉集』巻一・二四九六番、『右京計帳』天平五年（七三三）、『播磨国風土記』賀毛郡猪養野条などの史料にも「肥人」が記されており、「肥人」の実体については諸説提示されている。兎国使関連史料の肥人についての私の見解は、田中聡二〇一五と同様に、彼らの本拠地は肥国であって海人的職能をもって各地の豪族に属したが、南島路Ⅱコホリノミヤケ設置に対し実際に兎国使・遣唐使のために多くの労力を費やさねばならない点で隼人と利害が一致した勢力と考えたい。

## 参考文献

赤司善彦 二〇一四「古代山城の倉庫群の形成について―大野城を中心に―」『アジア文化論攷二』中国書店  
赤司善彦 二〇一五「古代山城の建物―鞠智城と大野城・基肄城―」『平成二七年度鞠智城東京シンポジウム資料』

東潮・田中俊明 一九八八『韓国の古代遺跡新羅編（慶州）』中央公論社

荒井秀規 二〇一五「渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡」『専修大

学社会知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報』一

荒木敏夫 二〇一四『古代日本の勝者と敗者』吉川弘文館

板橋和子 一九九九「律令国家の成立と展開」『熊本県の歴史』山川出版社

五十嵐基善 二〇一六「西海道における武具の生産・運用体制と鞠智城」『鞠智

城と古代社会』四

井上翔 二〇一六「鞠智城と東北の城柵官衙」『鞠智城と古代社会』四

今泉隆雄 一九八八「銘文と碑文」『日本の古代一四ことばと文字』中央公論社

大橋泰夫 一九九九「古代における瓦倉について」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記

念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

大橋泰夫ほか 二〇一二『古代日本における法倉の研究』科学研究費補助金基

盤研究（C）研究成果報告書

大橋泰夫 二〇一五「考古学からみた義倉の一考察」『社会文化論集…島根大学

法文学部紀要社会文化学科編』一一

岡田茂弘 二〇一〇「古代山城としての鞠智城」『古代山城鞠智城を考える

二〇〇九年東京シンポジウムの記録』山川出版社

岡田茂弘 二〇一五「鞠智城と古代日本東西の城・柵」『平成二七年度鞠智城東

京シンポジウム資料』

長洋一 一九八六「天平宝字五年の肥前国」『西南学院大学国際文化論集』一

長洋一 一九九五「古代西辺の防衛と防人」『古代文化』四七

小澤毅 二〇一一「七世紀の日本都城と百濟・新羅王京」『日韓文化財論集二』

奈良文化財研究所

小田和利 二〇一五「コラム基肄城」「朝鮮式山城」『特別展「四王寺山の

一三五〇年」図録』九州歴史資料館



小田富士雄 二〇一三『古代九州と東アジアⅡ』同成社

小田富士雄 二〇一五『大宰府都城の形成と律令体制』『古文化談叢』七四

小田富士雄 二〇一六『大宰府都城の形成と東アジア―「天智紀」山城出現の

歴史的背景―』『山城出土のⅠ期古瓦』『季刊考古学』一三六号』雄山閣

小場恒吉 一九四〇『朝鮮宝物古蹟図録第二・慶州南山の仏蹟』朝鮮総督府

大日方克己 一九九〇『古代における国家と境界』『歴史学研究』六一三

鏡山猛 一九七二『朝鮮式山城の倉庫群について』『九州考古学論攷』吉川弘文館

柿沼亮介 二〇一四『朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠

智城』『鞠智城と古代社会』二一

亀田修一 二〇一二『渡来人の東国移住と多胡郡建郡の背景』『多胡碑が語る古

代日本と渡来人』吉川弘文館

亀田修一 二〇一六『西日本の古代山城』『日本古代考古学論集』同成社

川口武彦 二〇一一『常陸国の多賀城系瓦からみた陸奥国との交流―那賀郡衛

正倉院・正倉別院出土瓦を中心として―』『古代社会と地域間交流Ⅱ―寺院・

官衙・瓦からみた関東と東北』六一書房

韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団 二〇一〇『土地住宅博物館

学術調査叢書第二九集・南漢行宮址第7・8次調査報告書』韓国土地住宅公

社土地住宅博物館・京畿文化財団

漢陽大学校博物館 一九八八『二聖山城二次発掘調査報告書』

漢陽大学校博物館 一九九一『二聖山城三次発掘調査報告書』

漢陽大学校博物館 二〇〇三『二聖山城一〇次発掘調査報告書』

木崎康弘 二〇一四『鞠智城選地論』覚書』『鞠智城跡Ⅱ論考編二』熊本県教

育委員会

木村龍生 二〇一六『鞠智城の役割について』『季刊考古学』一三六号』雄山閣

木本好信 一九九三『藤原広嗣の乱について』『山形県立米沢女子短期大学紀要』

二八

秦栄一 二〇〇八『古代中世済州歴史探究』

姜鍾薫 二〇〇六『新羅王京の防御体制』『新羅文化祭学術会議論文集』二七

菊池達也 二〇一四『律令国家成立期における鞠智城―「繕治」と列島南部の

関係を中心に―』『鞠智城と古代社会』二一

鞠智城跡「特別研究」 二〇一二〜一六『鞠智城と古代社会』一〜四

九州歴史資料館 二〇一五『特別展「四王寺山の二三〇年」図録』九州歴史

資料館

基山町史編さん委員会 二〇〇九『基山町史上巻』基山町

基山町史編さん委員会 二〇一一『基山町史資料編』基山町

金周成 一九八三『新羅下代の地方官司と村主』『韓国史研究』四一

金昌錫 二〇〇一『新羅倉庫制の成立と租税運送』『韓国古代史研究』二二

金昌錫 二〇〇四『倉庫制の成立と運営』『三国と統一新羅における流通体系の

研究』

金鎬詳・崔ジンウク 二〇〇九『新羅王京研究Ⅱ―王室倉庫と山城倉庫を中心

に―』『慶州史学』三〇

熊本県教育委員会 二〇一二『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八〜三二次調査報告』

熊本県教育委員会

鶏林文化財研究院 二〇一二『慶州富山城―学術及び実測調査―』鶏林文化財

研究院・慶州市

高正龍 二〇〇七『日本五島列島と沖縄地域出土外来遺物の調査』『張保皋大使

の活動とその時代に関する文化史的研究』財団法人張保皋記念事業会

国立慶州文化財研究所 二〇〇四『慶州南山精密学術調査報告書』国立慶州文

化財研究所

- 国立中央博物館 二〇一五『ガラス乾板でみる新羅の城郭』国立中央博物館  
 国立文化財研究所建築物研究室 二〇〇五『日本の東京大学所蔵・韓国建築・考古資料』国立文化財研究所  
 小西龍三郎 二〇一四『鞠智城跡の建物について』『鞠智城跡Ⅱ論考編二』熊本県教育委員会  
 小西龍三郎 二〇一六『山城の建物跡—とくに鞠智城を中心として—』『季刊考古学一三六号』雄山閣  
 近藤浩一 二〇一五『古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城—築城背景と役割を探る—』『鞠智城と古代社会』三  
 近藤浩一 二〇一六『新羅との外交・交流史からみた肥後鞠智城—Ⅰ期後半—Ⅱ期に対する再検討—』『鞠智城と古代社会』四  
 蔡美夏 二〇〇九『新羅の城祭祀とその意味』『歴史民俗学』三〇  
 崔珉熙 二〇〇五『慶州南山新城と長倉の名称に関する考察』『慶州文化論叢』八  
 酒寄雅志 二〇〇九『北関東の古代社会と渡来人・蝦夷』『國史學』一九八  
 佐藤信 二〇一四『鞠智城の歴史的位置』『鞠智城跡Ⅱ論考編』熊本県教育委員会  
 会  
 朱甫瞰 二〇〇二『聖山城出土の木簡と道使』『南山新城の築造と南山新城碑第九碑』『金石文と新羅史』知識産業社  
 眞保昌弘 二〇一三『下野国那須郡衙（那須官衙遺跡）』『東国の古代官衙』高志書院  
 眞保昌弘 二〇一五『古代国家形成期の東国』同成社  
 杉原敏之 二〇一六『遠の朝廷・大宰府』新泉社  
 杉原敏之 二〇一六『大宰府の造営と西海道諸国』『日本古代考古学論集』同成社

- 鈴木拓也 二〇一〇『文献史料からみた古代山城』『条里制古代都市研究』二六  
 鈴木靖民 一九八五『日本律令制の成立・展開と対外関係』『日本律令国家と新羅・渤海』『古代対外関係史の研究』吉川弘文館  
 鈴木靖民 二〇一四『南島人と古代国家』『日本古代の周縁史』岩波書店  
 鈴木靖民 二〇一六『東アジアのなかの飛鳥・藤原京の時代—文化形成を中心として—』『平城京・藤原京の新羅文化と新羅人』『古代日本の東アジア交流史』勉誠出版  
 高崎市教育委員会 二〇一六『多胡郡正倉跡第六次調査現地説明会資料』  
 武田幸男 二〇〇〇『新羅の二人派遣官と外司正』『東アジア史の展開と日本—西嶋定生博士追悼論文集』山川出版社  
 田中聡 二〇一五『隼人・南島と律令国家』『日本古代の自己意識』塙書房  
 田中正日子 一九九八『九州における律令支配と官衙』『古代文化』五〇  
 田中正日子 二〇〇九『大宰府の支配と肥前国の動向』『基山町史上巻』基山町棚橋利光 二〇一五『高安城と古代山城—国防策の推移とともに—』『河内学』の世界』清文堂  
 玉名市立歴史博物館 二〇〇五『玉名市史通史篇上巻』玉名市  
 中原文化財研究院 二〇〇七『南漢山城—暗門（4）—』財団法人中原文化財研究院・京畿文化財団  
 朝鮮総督府編 一九四二『朝鮮宝物古蹟調査資料』朝鮮総督府  
 張慶浩 二〇〇九『歴史現場・南漢山城の建築の価値とその解釈—行宮跡の統一新羅時代遺跡を中心に—』『南漢山城国際学術シンポジウム—南漢山城の城制と内部建築の再照明—資料集』  
 沈光注 二〇〇六『三国時代城郭と二聖山城』『二聖山城—二聖山城発掘二〇周年記念特別展』漢陽大学校博物館  
 沈光注 二〇一〇『南漢山城出土の銘文瓦に対する考察』『土地住宅博物館学術』

調査叢書第二九集・南漢行宮址第7・8次調査報告書

沈光注 二〇一四「南漢山城行宮跡で発掘された統一新羅建物跡」『南漢山城世界遺産センター教員研修資料』

出浦崇 二〇一三「上野国佐位郡衛正倉院」『東国の古代官衙』高志書院

出浦崇 二〇一六「上野国交替実録帳」と上野国における郡家の実態」『考古学ジャーナル』二月号

中村明蔵 一九八八「唱更国の実態」『隼人と二国の公民移住地と官道』『古代隼人社会の構造と展開』岩田書院

西住欣一郎 二〇一五「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」『平成二七年度鞠智城東京シンポジウム資料』

西別府元日 二〇一六「藤原広嗣―西海にきえた「大忠臣」」『奈良の都へ古代の人物二』清文堂出版

西本哲也 二〇一五「鞠智城と大宰府―古代の地方行政と西海道―」『鞠智城と古代社会』三

野崎千佳子 二〇〇〇「天平七年・九年に流行した疫病に関する一考察」『法政史学』五三

土生田純之・高崎市教育委員会編 二〇一二「多胡碑が語る古代日本と渡来人」『吉川弘文館』

浜田久美子 二〇一四「遣新羅使再考」『續日本紀研究』四〇八

林部均 二〇一四「新羅都城と日本都城」『文字がつなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島―』国立歴史民俗博物館企画展図録

平野卓治 一九九六「蝦夷社会と東国の交流」『古代王権と交流・古代蝦夷の世界と交流』名著出版

朴南守 一九九六『新羅手工業史』新書院  
朴方龍 一九八五「都城・城址」『韓国史論』一五

朴方龍 二〇一三『新羅都城』学研文化社

ピョンヘヨン 二〇一〇「南漢行宮出土統一新羅大型瓦の復元」『土地住宅博物館学術調査叢書第二九集・南漢行宮址第7・8次調査報告書』

松川博一 二〇一六「文献史料から迫る!」『シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!―宇美町からの新たな発信―』九州国立博物館・宇美町教育委員会

向井一雄 二〇一六『よみがえる古代山城 国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館

森克己 一九五五『遣唐使』至文堂  
森克己 一九七五『森克己著作選集 続日宋貿易の研究』国書刊行会

森公章 一九九八「耽羅方牘考」『古代耽羅の歴史と日本』『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館

矢野裕介 二〇一六「鞠智城跡とその変遷」『日本古代考古学論集』同成社  
矢野裕介 二〇一六「鞠智城(熊本県)」『季刊考古学』一三六号 雄山閣

山里純一 二〇二二「古代の琉球弧と東アジア」吉川弘文館  
山路直充 二〇一四「陸奥国への運穀と多賀城の創建」『日本古代の国家と王権・社会』塙書房

山田隆文 二〇一六「高安城(奈良県)」『季刊考古学』一三六号 雄山閣  
山中章 二〇〇一「古代宮都成立期の都市性」『新体系日本史6都市社会史』山川出版社

山中敏史 一九九一「古代の倉庫群の特徴と性格―前期難波宮の倉庫群をめぐって」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房

吉村武彦 二〇一四「律令制国家の成立と鞠智城」『鞠智城シンポジウム二〇一四成果報告書』

李基東 二〇〇一「新羅の国制改革と骨品制的権力構造の諸問題―日本律令国家との比較―」『國史學』一七三

李弘植 一九九一「三国史記における租の用法」『ソウル大学校論文集』三

李成市 一九九七「韓国出土の木簡について」『木簡研究』一九

李成市 二〇〇四「新羅文武・神文王代の集権政策と骨品制」『日本史研究』

五〇〇

李相勲 二〇一六「羅唐戦争期・新羅の大規模築城とその意味」『韓国古代史探究』二三

李チヨンウ 二〇〇六『南漢山城の築城法に関する研究』明知大学校産業大学院博士學位論文

李チヨンウ 二〇〇九「南漢山城の築城法」『南漢山城国際學術シンポジウム―南漢山城の城制と内部建築の再照明―資料集』

李ドンジュ 二〇一〇「南山新城の倉庫跡考察」『慶州・南山新城』慶州市文化財課

李ヒョンホ 二〇一〇「統一新羅瓦の製作技法考察」『土地住宅博物館學術調査叢書第二九集・南漢行宮址第7・8次調査報告書』

李文基 二〇〇九「新羅景德王代に再編された王都防御軍事組織と城郭の活用」『新羅文化』三四

李陽浩 二〇一四「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態―前期難波宮東・西八角殿研究への予察」『難波宮と都城制』吉川弘文館

梁正錫 二〇〇八「韓国古代正殿の系譜と都城制」『書景』

盧ヒョンギン 二〇〇八「南漢山城における統一新羅建物跡の平面復元に対する一考察」『建築歴史研究』一七巻五号

盧ヒョンギン 二〇一〇「南漢山城の統一新羅建物跡の建築学的考察」『土地住宅博物館學術調査叢書第二九集・南漢行宮址第7・8次調査報告書』

盧鋪弼 二〇〇九「統一新羅の灌漑施設」『震檀學報』一〇七

## 挿図出典

第1図 赤司善彦二〇一五

第2図 基山町史編さん委員会二〇一一

第3図 朴方龍二〇一三

第4図 朴方龍二〇一三

第5図 朴方龍二〇一三

第6図 東潮・田中俊明一九八八

第7図 小場恒吉一九四〇

第8図 鷄林文化財研究院二〇一二

第9図 韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団二〇一〇

第10図 韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団二〇一〇

第11図 韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団二〇一〇

第12図 韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団二〇一〇

第13図 韓国土地住宅公社土地住宅博物館・京畿文化財団二〇一〇

第14図 李成市一九九七

第15図 漢陽大学校博物館二〇〇三

第16図 漢陽大学校博物館二〇〇三

## 挿表出典

第1表 朴方龍一九八五・二〇一三、姜鍾薫二〇〇六をもとに作成

第2表 漢陽大学校博物館二〇〇三、沈光注二〇〇六をもとに作成